しなければならない三つのこと

日本宣教のために

2012年8月15日
西九州伝道所
佐々木正明

私は戦後の混乱期、北海道という「新大陸」で育ちました。北海道は明治になってから、内地（北海道以外の日本を、北海道の人はこう呼ぶ）の人々が、あちらからこちらからと寄り集まって、新しい生活を始めた広大な土地です。互いに内地にいた頃の、狭い土地に閉じ込められた自分たちの生活習慣や文化に固執しておられなくなり、しかたなしに、互いに折れ合い妥協し合いながら、内地に比べるとずっと開放的な「大陸的文化」を作り上げたのです。

私はまた、親兄弟あるいは親戚の付き合いというものが非常に希薄な、複雑な家庭で赤貧の内に育ちました。よく言えば独立独歩の精神で、悪く言えば無手勝流の一匹狼として戦いながら、やっとのことで高校卒業までこぎつけたのです。そのために、日本の伝統的文化からはかなり乖離した環境にいたというか、それに染まり切るほど馴染んでいなかったと言えます。

高校一年生のときにクリスチャンになったのですが、ちょうど、一緒に住むことになっていた母と兄姉は、こぞって、私がクリスチャンになることには反対しました。ただ、強く反対することが出来るほど、深い家族関係になかったこともあって、「賛成は出来ないけれど、本人の自由にしたら？」という程度のことでした。

いま思うと、そんな環境にいたために、周囲の人たちを無視したアメリカ仕込みの「個人主義キリスト教」でも、私はなんら違和感を覚えずに受け入れることができたのです。「本人がやりたいことをやるのがいい」「正しいことは正しい、悪いことは悪い」という私の感覚は、伝統的な日本人の文化よりも、アメリカ的な開拓精神の文化に共鳴できるものでした。それ以後も、私は家族とか親族とかいうものの反対は一切受けず、無関心、「本人の自由」、「勝手にしたら？」の中で、クリスチャンとして成長しました。

ですから、私が牧師になると言っても、誰も反対しませんでした。宣教師になると言っても、「あの子ならそのくらい徹底してやるわよね」と言われただけです。そんなわけで、私は海外宣教師となり、異文化の中で、特に未開部族と言われる人々の間で働く、特殊な機会を得ることができました。その中で、私は、自分が語っている福音と、自分が建てようとしている教会に、うす雲のような疑問を抱くようになりました。本来普遍的であるはずの福音も教会も、私の目の前にいる原始生活を送る人々にとって、あまりにも外国のもの、異質のものだったからです。

合計二十三年の海外生活の後、私は突然帰国することになりました。次男の病気のためです。そして、お世話になっていた牧師たちの勧めで、長崎県で開拓伝道を始めることになりました。それから十数年、私はかつてうす雲のように抱いていた疑問がますます濃くなり、容易ならぬものになりつつあるのを感じ、思考に思考を重ねてきました。その間、キリスト教関係の書物も少しは読みました。日本人が書いたものも外国人が書いたものもありましたが、日本の伝道のためにはほとんど役に立たないと思われました。そこで、自分の実際の働きの中で考え続け、聖書を読み続け、ここ十年ほどは、日本の宣教のために思うところを書き続けてきました。今回書こうとしていることも、その流れの中での提言です。

いま、日本の福音宣教に携わる日本人として、緊急に成し遂げなければならないことが三つあると考えています。一つは、私たちの語るべき福音の理解を改めることです。もっと正しい、聖書的な福音の把握をすべきだと言うことです。もう一つは、私たちが福音を語る対象の日本人を、日本人の目でもっとしっかりと見直し、理解し直すことです。三つ目は、いかにして、正しく理解した福音を日本人に分かりやすく、受け入れやすく伝えることが出来るかと考えて、これまでの宣教方策を変えることです。

Ⅰ．　語るべき福音を理解しなおす

私はプロテスタントの福音派団体に所属しています。他の福音派の団体から、「アッセンブリーは福音派ではない」と、クレームがついた時代もありましたが、今ではほとんどの

福音派の方々が、私たちがしっかりとした福音派の信仰を持っていることを認めてくださっています。事実、私たちは、聖書六十六巻を誤りのない神の言葉と認め、その上に、ただ、その上にだけ、私たちの信仰を築こうとしています。他の多くの福音派のように、様々な理屈をつけて理神論に流れたり、聖書の権威を疑ったりはしません。正直なところ、どこの団体や教派よりも福音的です。そのために、原理主義と揶揄されることさえあるのです。

ところが、私たちがそのように信じているにも拘わらず、私達の信仰、あるいは福音の理解は、どう転がしてみても、聖書に根ざしているとは言い切れないところが多いのです。その上、私たちのほとんどは、そのことにまったく気づいていないのです。私たちは聖書の福音であると思って受け入れましたが、私たちに伝えられ、教えられた福音は、聖書が教える福音ではなく、西欧文化の長い歴史の中で構築され、西欧人が西欧の考え方や感じ方、あるいは聖書の読み方で理解した聖書の福音であり、西欧人と西欧の文化に馴染むように組み立てられた福音なのです。

私たちが本当に日本の宣教を考えるのならば、まず、西欧的な神学の上に成り立つキリスト教信仰、あるいはキリスト教宣教ではなく、真に聖書の教えに立脚したキリスト教信仰を確立し、その信仰に立った宣教を心がけなければなりません。

Ⅰ．A.　聖書がなかったときの神学

驚くべきことですが、聖書に立脚した信仰をうたう私たち福音派の神学の多くの部分が、聖書とは関係のないところで考えられ、組み立てられたものなのです。それは、キリスト教の歴史を見ながら考えると容易に分かることです。この小文では詳しく触れることは出来ませんが、キリスト教会は、十六世紀の宗教改革のときまで、あまり聖書に触れる機会がないまま、成長拡大してきたのです。

Ⅰ．A．１．　使徒の時代

使徒の時代には、旧約聖書こそ現在と変わらないものがありましたが、新約聖書はまだ存在していませんでした。現在、新約聖書としてまとめられている書物は、当時、まだ断片的な記録として回し読みされるだけで、聖書としての権威も認められていませんでした。その中で、四福音書と使徒行伝、さらには書簡が書かれ、黙示録も著されましたが、到底、圧倒的な勢いで増え続ける「クリスチャン」たちに、充分に行き渡るほどの数に書き写されることも、配布されることもあり得なかったのです。クリスチャンたちはみな、口で語られた教えを、耳で聞いて学んだのです。

ただこの時代は、キリストがお語りになった教えを直接、自分の耳で聞いた人たちがまだ残っていました。またこの時代は聖霊の活動が顕著で、特に霊感の働き、すなわち神のみ思いを間違いなく書物に書かせてくださる聖霊のお働きが、頂点にあったときです。聖霊は新約時代の福音理解の進展や奥義の理解を、掲示によって導いてくださっただけではなく、それを霊感によって書き留めさせてくださったのです。

Ｉ．Ａ．２．　教父の時代

教父の時代になってしばらくすると、異端的な教えの流布も盛んになり、正当な信仰を守るために、キリストの言行録や使徒たちの書簡の編纂の機運が高まりました。その結果、現在の新約聖書に近いものが出来上がり、次々と書き写されて主要な教会に渡されていったことが考えられます。とはいえ、それらの書物が、旧約聖書と同等の権威を持つ書物であるという理解は、まだ出来上がっておらず、写本の数も少なかったために、教父といわれる人々を始め、クリスチャンたちの多くは、やはり伝承を頼りに信仰を保ち、神学を構築するのが普通だったのです。

このとき役立ったのは、ギリシヤ哲学の思考方法でした。当時の神学者や教会の指導者たちは、比較的出回っていた旧約聖書の断片と、後に新約聖書として編纂されることとなったなかなか手に入らない書物の断片とを、ギリシヤ的感覚で読み、ギリシヤ哲学の論理で理解し、ギリシヤ哲学の思考にならって神学を発展させて行ったのです。

Ｉ．Ａ．３．　暗黒時代

五世紀も過ぎ、キリスト教がローマ帝国の国教として勢力を増すと、新約聖書的な回心と信仰とをまったく経験していない「名前だけのクリスチャン」、便宜上のクリスチャンの数が圧倒的に増えて行きました。必然的に、教会は堕落を始め、いわゆる暗黒時代が始ま

りました。悔い改めもキリストに対する服従も知らない人々が、教会の指導者となり、地位を争い、名誉を競い、富を追い、権力を狙うようになってきました。使徒パウロが唾棄すべきもの、「糞」と判断したものを宝とする人々が、教会の最高位にまで上り詰めることさえ、稀ではありませんでした。そのような状態が十六世紀の宗教改革まで、およそ千年間も続いたのです。

もちろん、その間の教会指導者や神学者のすべてが、堕落し切っていたのではありません。まさに、聖徒と呼ぶにふさわしい人たちさえ少なからずいました。ただ、彼らが真剣に考え、構築した神学は、聖書に拠らない神学、「無聖書の神学」だったという、決定的欠陥を持つものでした。それは伝承に基づく神学であったり、ギリシヤ思考に基づく神学であったり、新しい宣教地の宗教や神話を取り入れた神学だったり、さらには、自分たちの教会や地位や立場に都合よく築かれた神学だったりしましたが、聖書がなかったのです。

Ⅰ．A．４．　暗黒時代の後遺症

このようなカトリックの「無聖書の神学」の傾向は、十六世紀以降、プロテスタントの聖書主義に警鐘を打たれ、聖書も印刷によって多量に出回り、誰の手にでも簡単に入るようになったはずなのに、現在でも後遺症として残っているのではないかと思われます。たとえば、マリアが罪の性質を持たないで母の胎に宿ったとする無原罪懐胎、そして、再臨以外のすべてのキリストの働きを、マリアも共に担ったとする神学などは、カトリックの長い歴史の中ではつい最近の進展です。

一九六二年から一九六五年まで行われた第二バチカン公会議は、多くの矛盾を含むものですが、プロテスタント教会に友好的態度をみせたことと、聖書の重要性を確認したということは改善として捉えて良いかも知れません。これによってカトリック教会の中にも聖書を真剣に学ぶ人々が増えてきて、かなり福音的な理解も出来てきましたが、あくまでも少数に過ぎず、まだ後遺症は続いています。

Ｉ．Ｂ．　無聖書の神学の例

聖書がないまま、あるいは聖書がないがしろにされたまま構築された神学は、数多くありますが、代表的なものを幾つか挙げてみましょう。

Ｉ．Ｂ．１．　洗礼の神学

使徒時代の洗礼が、キリストを信じる信仰の告白を前提としたものであったこと、また、浸礼であったことにはほとんど疑いの余地がありません。当然、キリストを信じる信仰が不確かな者の洗礼も、間違いとしてあり得たでしょう。また、何かの事情で浸礼にならなかった場合が絶対になかったとも言いません。しかし、基本的に信仰を前提とする浸礼だったのです。

ところが、洗礼は信仰の告白であるという側面と、キリストに従う者のイニシエーショ

ンであるという意義が強調される課程で、すべてのクリスチャンが洗礼を受けるのが当然と考えられるようになり、さらに、洗礼を受けていない者はクリスチャンではない、クリスチャンでない者は救われていないという理解が出来上がったようです。それがまた、洗礼を受ければ救われるという安易な思いに至って、何が何でも洗礼を授けるほうが良いという考えに流れて行ったと思われます。

それはパウロが理解していたものとは異なっていましたが、その頃、パウロが書いたものの権威は現代ほど認められていなかったことと、広く行き渡ってもいなかったこともあって、通俗的な説が広がったのでしょう。そのために、新生児や乳幼児の死亡率が高かったその当時、親たちは、生まれたばかりの赤子に直ちに洗礼を授けて欲しいと望み、教会はそれに応えるようになったのは当然の成り行きです。

幼児洗礼が一般化すると、当然滴礼や灌礼も一般化しました。新生児や乳幼児に浸礼を施すのは困難なことが多かったからです。また、生まれ出てすぐ死ぬ赤子を想定して、特別に、産婆や看護婦にも、洗礼を授ける権威を与えることにもなりました。さらにキリスト教がローマの国教となるに及んで、圧倒的な数の人々が「信仰の告白」をするようになり、それらの者たちに手際よく授けるためには、浸礼は好まれなかったことも考えられます。

Ⅰ．Ｂ．２．　聖餐の神学

カトリック教会が最も重要な秘蹟と考えているのは、私たちが聖餐式と呼んでいる聖体拝受です。聖体拝受という日本語訳でも分かるように、カトリックでは聖餐のパンは文字通りキリストの体であり、ぶどう酒は文字通りキリストの血であると教えます。見たところ、形も味もパンとぶどう酒ですが、その実質において、司祭の祝福の祈りによって、文字通りキリストの体と血に変化するというのが、カトリックが考え出した魔術的というか、迷信的というか、独特な化体説です。

またカトリックでは、この聖体拝受は毎週繰り返して献げられる犠牲であり、これを逃すことは犠牲にあずかれないことであり、罪が赦されないことになると教えます。逆に言うと、聖体拝受にさえあずかるならば、どのような罪も赦されることになります。ですからカトリック信徒は、「何が何でもミサ（聖体拝受）に行く」ということになるわけです。これも、キリストの犠牲は完全な犠牲であり、ただ一度ささげられただけで完成されたものであって、くり返されることはありえないと教えるヘブル書の教えに反していますが、まだ聖書がなかったのです。

私が宣教師として働いていたフィリピンはアジア唯一のカトリック国でしたが、人々は土曜日の夜から日曜日の朝にかけて、ドンちゃん騒ぎをするのが普通でした。どんな罪を犯しても、日曜日の朝早く聖体拝受をすることによって完全に許されるのだから、突発的な事故でもない限り、まず、間違いなく天国に行けるというわけです。月曜から土曜まではまじめに生活しなければ、「聖体拝受をする前に死んでしまう確率が高くなるから、気をつけろ」ということになるのです。これはフィリピンのようなラテン的カトリック信仰だけ

のことかと思っていましたが、日本のカトリック信仰にも同じ傾向があることも知りました。

また現代では、信徒たちはぶどう酒にあずかることができません。信徒はパンだけをいただくことが出来ます。それは、何かの粗相があってぶどう酒をこぼしてしまうと、拾うことができなくなり、キリストの血を無駄にし、穢してしまうことになるからです。パンならば、拾うことが出来ますが、液体のぶどう酒ではそれができません。それでカトリックではいま、聖体拝受を、「血のない犠牲」と呼んでいます。これも、血を流すことなしに罪の許しはあり得ないと教える、ヘブル書の教えに矛盾するものです。

Ⅰ．Ｂ．３．　教会の権威と聖職者

教会には最初から指導者たちがいました。人々の集まりには絶対に指導者たちが必要であり、教会にも当然のこととして指導者たちがいて、新約聖書にもその存在と必要性が記されています。その指導者たちが、他の一般の信徒たちとは異なる身分の「聖職者」であるという意識は、かなり早い時期から現れていたようです。神からの特別の信任を受けた聖職者というものの存在は、聖書からもある程度擁護できます。ただ、新約聖書の基本は、すべての信徒が祭司であり預言者です。旧約聖書的な身分制度というものは、新約聖書には見られません。

ところが「無聖書の神学」が発展させられ、はっきりとした身分制度として聖職者というものが出現し、信徒の立場と聖職者の立場の違いが厳格に分けられ、一般の信徒たち

からは新約時代の信徒の特権である、祭司の務めも、預言者の務めも、キリストの証人としての務めも、キリストの大使としての務めも取り上げられてしまいました。今の私たちの間でも、按手礼を受けた教職でなければ洗礼を授けてはならない、聖餐式を行なってはいけないと言う伝統が、当たり前のように守られています。さらに、聖職者の中にも、いわゆるヒエラルキーが出来上がり、厳しい上下関係が定められ、ローマ教会の権威と、その最上部にいる教皇のキリストの代理としての権威が定められたのです。このような教会の形は、世の中の絶対君主制を取り入れ、それを神の名によって強化したものでした。それをより円滑に行うために、ローマ教皇はペテロの後継者であり、ローマ教会はペテロによって建てられたという、神話が作り上げられたのです。

Ⅰ．B．4．　神の国

キリスト教はローマ帝国に認可され、続いて国教となるに及んでますます世俗の力を強め、やがて、ローマ法王はローマ皇帝と力を争うほどにまでなりました。教会は文字通り、当時の「全世界」を席巻しようとしていたのです。そのような教会にとって、教会と神の国とを同一視する見方が生まれ、それがどんどん膨らんで行きました。教会の勢力を伸ばすことは神の国を広げることであり、キリスト教を国教としている国々が領土を広げることは、神の国の領土を広めることとなり、植民地主義も侵略も、神の名において認められていたのです。

これらの教えがひとたび正式に認められ、公に教えられる教理となってしまうと、伝統

と権威を重んじる教会にとって、それを訂正するのは非常に困難なことです。聖書のない時代に聖書なしに構築され、教会の最も大切な秘蹟となっていることを、後になって、聖書の教えとは違うからと言って変えることはできません。ましてや、カトリック教会にとって聖書は教会の産物に過ぎず、生み出されたものより生み出したものの権威が上だと理解するからです。そのために、その無聖書の神学を非聖書的に固め、反聖書的に発展させることになってしまうのです。

Ⅰ．C.　プロテスタントの出現と彼らの神学

十六世紀にわたる聖書が手に入りにくい状態、それゆえに「無聖書の神学」が何の疑いもなく通用した時代は、宗教改革によって大きく変わりました。煉獄と行いによる救いという、無聖書の神学を悪用したカトリック教会の金集めに対して、疑問の声を上げたことに始まる宗教改革は、結局、教会の権威、その頂点たる教皇の「キリストの代理」としての権威に疑問を投げかけることとなり、教皇に代わる権威、あるいは教皇の権威を超える権威を持たなければならなくなりました。

Ⅰ．C．１．　聖書の権威の高揚

当時のカトリックの行状と信仰に疑問を感じた人たちは、教会や教皇の権威に代わる権威として聖書を持ち上げ、聖書に聞き聖書に従う信仰を打ち出しました。彼らは、金によって免罪符を買って煉獄から天国に移るという、「行いによる救い」を否定して、「信仰

による救い」を聖書の記述から明確にしました。聖書に立脚した信仰と、信仰による救いがプロテスタント教会の旗印となりました。

私たちの信仰も、この聖書主義と呼ばれる信仰形態を受け継ぐものです。信仰と生活のすべての面において、聖書の権威を認め、聖書に拠って立つ信仰を標榜するものです。

Ｉ．Ｃ．２．　無聖書の信仰を伝統として引きずっている神学

ところがそのプロテスタント教会も、自分たちが疑問に感じなかった部分、自分たちも同調できた部分は、たとえ、無聖書の神学であっても、その誤りを正して改めることはしなかったのです。たとえ、聖書には異なったことが教えられていても、プロテスタント教会はそれに気づかず、あるいは気づいてもあまり重要には感じないまま、自分たちの教会の教理として受け入れてしまったのです。

人間は誰でも、自分の誤りを認めるのはいやなものです。特に教会は神の名において教え、指導しているのですから、自分たちの誤りを認めないのを伝統としてきたのです。したがって、聖書に立脚すると自認するプロテスタント教会でも、聖書に拠らない神学が伝統として保持されるだけではなく、それに反する聖書の教えを無理な解釈、白を黒と言いくるめるような「一流の神学」で、自分たちを正当化してきたのです。

Ｉ．Ｃ．３．　プロテスタント教会内の幼児洗礼

たとえば、いかに言を弄しても、幼児洗礼は聖書の教える洗礼ではありません。ところが、宗教改革当時のプロテスタント教会のほとんどは、幼児洗礼に疑問を感じていなかったために、間違いをそのまま引き継ぎ、聖書の教えを受け入れませんでした。ただ、カトリックの神学には通じていない、素人集団であったアナバプテストの人たちだけが、信仰の告白による洗礼を主張したのです。それに対し、プロテスタント神学の雄であったカルビンは、それほどもう一度洗礼を受けたいのなら「俺が授けてやろう」とばかりに、凍て付く川にかかる橋から、十六人のアナバプテストの信徒たちを逆さ吊りにして川に浸し、殺してしまったという話は良く知られている通りです。単純に聖書を読むならば、幼児洗礼の誤りは明白で、「無聖書の神学」なのです。それなのに、いまだにプロテスタントの主流派のほとんどが、自分たちが引き継いだ伝統に固執し、「無聖書の神学」である幼児洗礼を固守して、聖書の明白な教えを退けているのです。

このような無聖書時代の洗礼の神学を引き継ぎ、それに固執するあまり、洗礼に関わる様々な分野までが、聖書の教えからかけ離れたものとなってしまっています。たとえば救いの神学、たとえば教会の神学、たとえば聖職者に関わる神学などです。

Ｉ．Ｃ．４．　プロテスタント教会の聖体拝受

さらに聖餐式では、未信者には聖餐に与らせないなどということを、絶対の基準である

かのように主張し、これに違反した牧師を処罰するようなことが、今でも当然のように行われています。聖書をどのようにひっくり返して読んでも、聖餐を未信者に与らせてはいけないなどという教えはありません。オープンだとかクローズドだとかいう議論もありません。そのような議論の根底にあるのは、パンとぶどう酒が文字通りキリストの体と血に変わるという、「無聖書の神学」の魔術的な信仰、聖餐を秘蹟だとするカトリックの聖体拝受の卵の殻を、まだ尻にくっつけているひよこだからです。

多分、現在でも九十九パーセント以上の教会は、第Ｉコリント十一章に記されているパウロの厳しい言葉を示して、未信者を聖餐に与らせるのはとんでもないことだと言うでしょう。でも、この部分を素直に読むならば誰にでも明白なように、パウロの憤りは、未信者が聖餐にあずかることに対するものではありません。そのようなことには、一言も触れていません。パウロが頭から湯気が昇るほど激しく憤り叱責しているのは、本来、愛の表現の場である愛餐会、思いやりと分け合う精神の象徴である「アガペー」で、金持ちたちが、自分たちの持ってきたものをさっさと飲み食いし、酔っ払っている者さえ出ている脇で、貧しい者たちが食べるものもないまま捨て置かるという、無関心と無慈悲、差別と拒絶が堂々とおこなわれていたという、コリント教会のていたらくに対してです。

１．　Ｃ．５．　プロテスタント教会の反聖書主義

宗教改革の方向性としては一致できたために、これからは協力して働きを進めよう

と、ルターとツイングリが会談をしたことがありました。彼らはただ一つの命題以外はすべて折り合うことが出来たのに、双方ともどうしても譲れなかったことがあって、とうとう協力し合うことは出来ませんでした。問題となったのは聖餐に対する考え方です。ツイングリは、あまりカトリックの神学的影響を受けていなかったせいか、パンとぶどう酒をキリストの体と血の象徴として理解しましたが、ルターはカトリックの僧として生きてきて、魔術的要素が強い伝統的なカトリックの聖餐に疑問を感じていなかったのか、その神学を変える必要を認めず、「これは私の体である。これは私の血である」とおっしゃったキリストの言葉を取り上げて論じ、これは文字通りキリストの体、キリストの血であるといって譲らなかったのです。聖書主義を掲げたルター自身が、自分の内にある伝統に固執して聖書の字義通りの解釈を盾に、聖書の本来の意味を曲げ、聖書主義を標榜するプロテスタント教会の、反聖書主義の基を据えたのです。

この程度のことは、一度、自分たちの神学的立場だとか、伝統的に受け継いできた教えだとか言うものを横において、ごく普通の手紙かエッセイでも読むような通常の感覚で、関連する聖書箇所を読むならば誰にでも分かることです。それを分からなくしているのは、一流の神学的こじつけであり、自分たちの立場に対する防御的態度です。コリント教会の合同の集まりには、間違いなく未信者も来ていました。しかし、未信者をわけて、信者だけに聖餐が許されるなどということは、絶対にあり得なかったのです。

Ⅰ．C．６．　カトリック教会の政治形態を引き継いだプロテスタント教会

さらにプロテスタント教会の多くは、カトリックの教会政治の形態を引き継いでいます。特に、聖職者と一般信者という分類は、新約聖書には見られないものですし、聖職者のための按手礼などという仰々しいものも、存在しません。しかし私たちの教会の多くは、ごく当たり前のように、信徒と教職者を二分し、按手礼を行い、その身分と働きに明白な差別をもうけています。教職者にしか行うことが出来ない領域を設け、一般信徒の参加と奉仕を拒んでいます。その結果、私たちの教会の多くには、身分差別や働きの差別が無かった初代の教会に比べると、教会に与えられた賜物が軽んじられ、躍動性が薄れ、決定的に不活発になっています。

神学というものは、ただ純粋に聖書を学んで構築するものではなく、聖書を読むためのきっかけ、聖書から学び取ろうという何かのきっかけがあって可能になります。つまり、社会的状況だとか、政治的背景だとか、経済問題だとか、哲学的疑問だとか、世俗的学問の進歩だとか言うものがあって聖書が読まれ、学ばれ、神学が築かれるのです。したがって宗教改革者たちの神学は、宗教改革当時の社会的必要、政治的必要、信仰的必要、あるいは学問的背景というものがあって、初めて生まれ出ることが出来たのです。

例えばイギリス国教会の信仰は、王が妃を離婚し新しい妃が欲しかったという事情から生まれましたので、離婚、再婚の問題にあらたな神学的伝統を築きました。当初こそ、それ以外になんら神学的な独自性はありませんでしたが、カトリックの権威から離れたた

めに、プロテスタントの信仰に近づきやすかったという面で、プロテスタントとその神学の発展に、それなりに貢献することが出来たのは幸いでした。

そういうわけで、私たちが聞き、学び、受け入れてきた神学は、「聖書に立脚した神学」という名の下にあるのですが、その実、多くの重要な部分は、「聖書が無かったときの神学」、いわば「無聖書の神学」であったことがはっきりしました。無聖書の神学であったために、それらの多くが、いまや非聖書的な神学となっています。それを教会は伝統として引き継いでしまい、それを正当化するために正しい聖書の読み方を捨て、無理やり自分たちに都合のいい読み方をしてきました。それがいわゆる「神学論争」として、一般の人々の嘲笑を浴びるもととともなったのです。

Ⅰ．D.　西欧の神学

問題はそれだけではありません。私たちが受け入れ、私たちが宣べ伝えている福音は、長い「西欧キリスト教文化」の中で「西欧キリスト教文化」に都合よく構築された、「西欧キリスト教文化」のための福音なのです。言い換えると、日本文化とは関係のないところで、日本文化にははなはだ不都合に築き上げられた、日本文化のためにはならない福音なのです。

私たちがいま受け入れている福音は、使徒時代、教父時代、暗黒時代、大航海時代、そして文芸復興と宗教改革を経てプロテスタントに引き継がれ、啓蒙主義、合理主義、自然

科学主義、個人主義、民主主義などの洗礼を受けてきた神学です。使徒時代から２千年に及ぼうとする中で、聖書が真剣に学ばれて聖書の神学が高揚されたのは、わずか四分の一の年月に過ぎません。しかもそれは「無聖書の神学」を伝統として受け継いだものを、聖書の無理強いの解釈によってつじつまをあわせた神学でした。

西欧の国々の多くでは、ほとんどの時代キリスト教を国教として、あるいは少なくても準国教の扱いで受け入れていました。国の政策、社会の成り立ちと動き、人々の生活習慣が、キリスト教的になっていました。そのキリスト教は、聖書に基盤を置いたキリスト教ではなく、無聖書の神学に立ったものでした。人々は自分たちの信仰や生活習慣、あるいは国家の形や政治形態までもキリスト教のものと理解していたかもしれませんが、実態は、聖書の教えとはかなりかけ離れたものでした。

Ｉ．Ｄ．１．　西欧人のために発展させられた神学を日本人に語ってはならない

西欧のクリスチャンたちは、当然、自分たちの文化習慣をおおむね良好なものとして保持し、それを擁護し、強め、それに乗る形で信仰を発展させてきました。それはちょうど、日本人がタクアンを好ましく懐かしい伝統食品として大切に保持し、様々な食物を新たに取り込む中でも、その味を深め発展させてきたのと同じです。外国人には臭いと言われ、鼻をつままれても、日本人はタクアンを無くそうとはせず、かえってタクアンの改良に取り組んでいるのです。西欧キリスト教文化は、西欧のタクアンのようなものです。西

欧人の多くが日本のタクアンに顔をしかめるように、日本人は西欧のタクアンに息を止めるのです。

王や皇帝をいただいていた時代は、王や皇帝を正当化し、それに沿った政治形態や一般人の生活様式を定める信仰形態が築かれてきました。立憲君主主義が主だった時代は、その政治社会に適応し、それを擁護する信仰形態が勧められてきました。文芸復興でギリシヤの古典文化がもてはやされ、人間の知性が高揚されたときには、その線に沿った聖書の読解が推奨され、一段とギリシヤ的な神学や信仰形態が発展させられてきました。啓蒙思想が華やかになり合理主義が花を咲かせると、啓蒙思想に合った信仰形態が取り入れられ、合理主義と手をつなぐことが出来る理神論的な神学に流れていきました。奴隷制度が自分たちに都合がよければ、それを正当化する聖書の読み方も出来ました。植民地主義が盛んだったときには、それに迎合すること出来る信仰のあり方が形成されました。産業革命の時代には産業革命をさらに推進させる神学が持てはやされました。科学が絶対的な真理として人々の信仰を集めだすと、自然科学に迎合した神学や信仰が流行しました。個人の重要性が謳われ、民主主義や資本主義経済が世界を席巻するようになると、神学も個人主義を当然とする神学になり、民主主義が聖書の教えであるかのように語り、資本主義と仲良く手をつなぐ説教が幅を利かせ、繁栄の福音などというグロテスクな神学までが誕生しました。

日本に伝えられた福音は、その時代の西欧文化に合わせて発展させられた「混ぜ物入り

の福音」だったのです。宣教師たちは、50パーセントの混ぜ物入りの福音や、９０パーセントの混ぜ物入りの「クリスチャン生活のあり方」を持って、日本の宣教にあたったのです。私たちが受け入れ信じてきた福音、またこの日本で宣べ伝えて来た福音は、そういう福音でした。しっかりと聖書の教えに立ったものでもなく、日本の文化や日本人の生活習慣を考慮した福音でもありませんでした。本来、そのような福音が日本という国で語られてはならないのです。

Ｉ．Ｄ．２．　異邦人について真剣に考察したことがなかった西欧神学

使徒パウロの時代から二十世紀にわたって、綿々と伝統を引き継いできた西欧キリスト教徒たちは、あたかも、自分たちが選民であるかのような錯覚に陥っていたようです。ユダヤ人から引き継いだ旧約聖書と、その旧約聖書の理解に立ち、罪と悔い改めを説く新約聖書の教えに満足していた彼らは、旧約聖書の律法も新約聖書の罪の悔い改めも知らない、異邦人に対する神の取り扱いについては、あまり真剣に考えたことがありませんでした。

特にプロテスタントの神学には、ウイリアム・カーレーの時代に至るまで、宣教論がありませんでした。強いカルビン主義の傾向のために、救われていない異邦人に対しては無関心だったのです。ところが、いざ世界宣教に乗り出すと、自分たちが福音を宣べ伝えなかったために、異邦人たちが様々な宗教を発展させたという責任に気づかず、偶像礼拝者と責め立てたのです。日本人が今だに「偶像教徒」なのは、日本に生まれた日本人の責任ではなく、日本に福音をもたらすのにやたらと手間取り、仏教に先を越され、神道

の浸透に手をこまねいていた、西欧キリスト教徒の責任なのです。

私たち日本人は、旧約聖書を知らず、新約聖書も知らない異邦人なのです。その異邦人に対する神の取り扱いについて、もっとしっかりとした学びをしなければなりません。たとえば、キリストの働きと教えに反発した、当時のユダヤ人たちに対するキリストの厳しいお言葉を、そのまま律法を知らない日本人に当てはめて、キリストを信じないから「地獄行きだ」などと言い募るのは、まったくの的外れです。キリストは、律法を深く知り、またキリストの教えを直接聞きながら、なおもキリストに敵対していた人々に語ったのであり、律法もキリストの教えも知らない異邦人にお語りになったのではないのです。

ただし誤ってはなりません。日本人も西欧の人々と同じように、キリストの贖いによって救われるのであり、自分自身という律法によって救われるのではありません。（ローマ2:12）しかし、もしも日本人が旧約聖書の律法によって裁かれるべきではないとしたら、つまり、イスラエルという特殊な民族に与えられた律法によって、とやかく言われるべきものではないとすると、日本人に対する私たちクリスチャンの態度は、相当変わらなければなりません。偶像礼拝に対する取り扱いとか、他の宗教に対する態度など、考え直すべき点はたくさんあります。

私たちはいま、異邦人と律法、裁きと滅び、そして良心などについて語ったパウロの言葉に注目すべきです。（ローマ書２：6～16） 異邦人には、「自分自身が律法である」とはど

いう意味なのか。その律法とは具体的に何を指しているのか、その機能は何なのか、救いとの関係はどうなのか、また、パウロがここで併記するような形で触れている、「証をする良心」とは何なのか、いまや西欧キリスト教神学が見落としていたこれらの点について、異邦人である私たちが真剣に考察しなければなりません。しかも、無聖書の神学ではなく、聖書の神学として熟慮しなければなりません。偶像礼拝者である異邦人自身が、律法であり得るのです。少なくても、異邦人たちを偶像礼拝者として責め立てるだけの神学は、大きな間違いです。

Ⅱ．　日本人を理解しなおす

福音を語るとき、福音をしっかりと理解しておくことが肝要ですが、もうひとつ、福音を語る相手、対象を良く知ることが重要です。５歳の子どもに、大学生向きに書かれたクローンの理論と技術の話をしても、始まりません。原子も陽子も中性子も知らず、宇宙の誕生などということにまったく興味のない人に、ヒッグス粒子の話をしても意味不明です。

ヒッグス粒子が発見されたというニュースが、先日世界を駆け巡ったとき、日本の科学博物館などでは、この難しい物理の世界の話を、いかに小中学生にもわかりやすく説明しようかと、懸命な努力をしたようです。その結果、出来てきたいくつかの説明をテレビで観ましたが、まったく事実とは異なるというか、関係がない、単に類似した例えを持ち出しての、基本的なコンセプトの説明でした。それでも、結構難しく、「なんのこっちゃ」

と言っている「おっちゃん」がいたものです。

そこで、キリスト教に関しては幼稚園生よりも無知な日本人に対して、ヒッグス粒子の話よりもさらにさらに深遠な内容の福音を、いかにわかりやすく伝えることが出来るかを考察するために、日本人を理解する努力をしましょう。ただしこの小文では、特に重要と思われる幾つかの点に触れるだけにとどめておきます。

Ⅱ．A．　日本人の世界観

日本人は、一般的に確固たる世界観というものを持っていません。ですから、そのときと場合によって、一人の日本人がまったく異なった世界観を主張したり、明らかに矛盾する二つ以上の世界観を混同した意見を言ったりします。

たとえば、日本人ほど唯物論に影響されている人種はいないといわれ、すべての物事を唯物的に説明しようとします。天文学や物理学の世界で他の銀河系のことを論じたり、地球外生命の存在の可能性を想像したりするとき、普通の日本人は、西欧人のように神について考えたり語ったりすることなどありません。純粋に唯物的に語るのです。日本人が理屈を言うとき、無意識のうちに、神を始め霊的な存在を否定する前提から始めます。いのちは単に細胞の物理的反応に過ぎないと考えるわけです。ところがその同じ日本人が、本当のところは悪霊、怨霊、背後霊、幽霊、死霊などを恐れながら生きていています。年始には神社に詣で、受験の時には神頼みをし、車には交通安全のお札をぶら下げます。そして誰も

それを不思議に感じないのです。

この同じ日本人が、仏教的な感覚で、宇宙全体を生命体と見ているふしがあります。ただし、そこにあるのは法則としてのいのちであって知・情・意をもった存在ではありません。それは、唯物的な考え方とも比較的容易に結びつきます。それはまた仏教を通してもたらされた、ヒンズー教の輪廻の思想にも容易に溶け込むことが出来ます。物の輪廻といのちの輪廻が相乗効果を生み出すのです。つまり、物理的な意味で新しい生命体に吸収されることと、いのちの生まれ変わりを漠然と混同して信じているのです、全体的には噛み合わないところが随所にありますが、そのような矛盾をものともしないおおらかな「信仰」となって、日本人の心に宿っています。

日本人は、輪廻による生まれ変わりを信じる一方で死後の世界を信じ、この現世と同じ意識を持ったまま、つまり同じ人間として、何らかの形で死後も存在し続けると信じています。それで家族や近しい者が亡くなると、「天国で見守っていてくれる」と言って慰めるわけです。でも、それも強い確信に満ちたものではなく、ほとんど単なる慰めに過ぎないと、語る者も聞く者も理解し合っているわけです。

世界観が曖昧で、来世に対する確固たる信念を持っていないため、日本人は現世を非常に大切にします。命あってのものだね。死んだら終わり、生きていてこそ花です。そのために、生きていることこそ大切だと、むやみやたらに延命処置が施され、社会問題化してい

ます。

さらに、日本人はアニミズムと呼ばれる世界観をもっています。唯物主義が徹底していると言われながら、日本人の多くは、私たちの物質の世界、いわゆる三次元の世界に留まらない、様々な霊の世界、異次元とも呼ぶことが出来そうな世界の存在を感じています。信じているというより、感じているのです。その世界には、幽霊や死霊や背後霊や天使や様々な霊的な存在があって、人間世界にも影響を及ぼしています。というより、三次元の世界と異次元の世界は切り離された別々の世界ではなく、重なり合った世界なのです。特殊な能力を持った者は、その異次元の世界のことを強く感じ取り、知ることができるだけではなく、行き来さえ出来ることもあると言われます。

もうひとつ、気づかなければならない大切な点は、日本人は自分たちの日本を支配し、これを恵み、豊かに祝福しておられる大きな存在を感じながら、生活していると言うことです。それは強く激しい感覚ではなく、心の奥底に横たわっている揺るがない感覚、生活のあらゆる方面に浸透している感覚です。少なくても、日本の自然界、山、川、谷、海、空、季節、雨、風、植物、作物、穀物、動物などを支配して、日本人を慈しみはぐくんでこられた存在を、日本人は心の底で感じ取り、感謝を捧げてきました。このお方は誰にも説明できませんが、さまざまなアニミズム感覚の霊どもとは違って、恐れの対象ではありません。かえって、日本人の感謝と礼拝の対象、心の向けどころなのです。

このように矛盾した世界観を持ちながら、そのときその場の話の流れに応じ、意識をまったく別の世界観に切り替えて、話しに加わることが出来るのが日本人なのです。

Ⅱ．B．　日本人の宗教観

日本人の多くは唯物的で、神々の存在を否定します。ところが宗教の大切さは率先して認めます。宗教が果たしてきた役割も積極的に認め、その功罪を論じながらも、宗教は本質的に良いものであると性善説に立って論じます。

日本人にとって宗教とは人間の幸せのためにあり、人間に仕えるものです。宗教が人間の幸福のために仕える限り、宗教は良いものなのです。仏に仕えるのならばクリスマスは祝いませんが、宗教を自分の幸せのために仕えさせるならば、クリスマスを祝い花祭りをすることが出来るわけです。人間が宗教に仕える、そのためにいのちを賭けるなどということは、日本人には基本的にあり得ないのです。それは、日本の歴史上、宗教がどのように取り扱われたかということを調べると、明らかになります。日本の為政者たちの多くも何らかの宗教を信奉していたことが多いのですが、それに仕えるというよりは、自分たちの都合に合わせて宗教を利用して、国を導いてきたのです。

また、日本人は宗教そのものよりも宗教心を大切にします。どのような宗教か、何をどのように信じているかということについては、あまり強い関心を示しません。むしろ、すべての宗教は、結局は同じだ。「分け入れるふもとの道は多けれど同じ高嶺の月を見ゆら

ん」と言われる通りだと考えます。何か、高いところにおられる方、あるいは崇高な存在を感じ、そのお方を崇めて、そのお方に見て頂いていても恥ずかしくない生き方をすることが、大切だと考えます。そのような宗教心があるからこそ、日本人は高い倫理を保ってきたのだとも言えます。それは、「菊と刀」が言う「恥」の文化とはかなり異なっています。道端に立てられていた、「天知る、地知る、人知る」という看板は、そのことを物語っています。

宗教より宗教心を大切にする、つまり、何を信じているかはともかく、信じるということが大切だという日本人の宗教感覚は、観念論的であるといえます。また、非常に思索的であるかのように見えながら、実際は、自分がどう感じ、どう体験するかが大切だということで、むしろ実存的ともいえます。それは後で触れる実利主義にも通じるものです。

Ⅱ．C.　日本人の神観

日本人は宗教心を大切にしながら、宗教はあまり大切にしないことが、あるいは、信じる心を大切にして、信じる対象はあまり大切にしないことが、日本人の非常に曖昧な神の観念にも現れています。この、日本人自身が良く理解していない曖昧な神観を、しっかりと把握することが大切です。

Ⅱ．C．１．　多神論とアニミズム

日本語の神と言う言葉は、現代では「神」という漢字が充てられることが普通ですが、加味とも、守とも、頭とも、上とも書くことが出来ます。もともとの日本語では、「うえ」と言う意味です。ですから、髪の毛の「かみ」も上の毛という意味です。「上様」は殿様ですが、「お上にも情けはある」などと、人の上に立つ権力者を表しました。つまり、日本語の「かみ」は、普通の人間より高い者、上位の者、力がある者、よくできる者という意味です。うちのカミさんは、自分の家で一番権力の強い人のことです。ですから、料理のうまい人は料理の神にもなれ、サッカーの上手な人はサッカーの神になれるわけです。力のあるピッチャーは守護神などと呼ばれるようになりました。また人間だけに留まらず、通常の人間より何かの点で勝っているものは、それだけで、「かみ」に祭り上げられました。そのために猫の神、犬の神、蛇の神と、あらゆるものが神とされ、八百万の神々に及ぶのです。

そういうわけで、日本の宗教は多神教に分類されはしますが、その分類の仕方は西欧の宗教学の分類の仕方です。言うならば、インチやヤードで日本の住宅のサイズを測るようなものです。もしも、このような日本の神概念が多神教と分類されなければならないならば、イスラエルの人々も「間違いなく」多神教徒でした。でも西欧のキリスト教徒たちはイスラエルの人々は一神教だと言います。日本を測る物差とイスラエルを測る物差が異なっているのです。イスラエルの人々はバビロン捕囚を境に徹底した一神教になったといわれていますが、キリスト在世当時の一般人は、人間より上の力を持つ天使や悪魔や悪霊、あるいは幽霊の存在を信じていました。これらは、日本語でいう神々に同じです。ただ、

「神」という言葉を使っていなかっただけに過ぎません。概念は良く似ているのです。イスラエルの人々も、アニミズムの世界観を持っていたのです。ただ彼らは明確に、「天地創造の神」という絶対者の存在を前提としていたのに比べ、日本人は絶対者に対する曖昧な感覚しか持ち合わせていないだけです。

ただし現在のところ、私は、日本人の八百万の神々を認める多神教的概念と、いわゆる死霊や悪霊や妖怪やお化けの、アニミズムの世界観とのつながり、あるいは相違について、よく理解できないままでいます。何らかの繋がりがあるようですが、非常に曖昧なので、理解することが困難です。ただ、イスラエルのアニミズムの世界の存在者たちは、日本人の感覚からすると、神々ではなく、諸霊だとも言えそうです。

日本人のほとんどはアニミズム的な存在者たち、つまり、幽霊や死霊あるいは怨霊や背後霊は認めて恐れていますが、神々の存在は否定していることが重要です。多くの神々を信じていると言われているのが日本人ですが、普通の日本人にとって八百万の神々は神話の世界のことであり、信じるに足りないものです。野球の神も、サッカーの神も、表現の一つに過ぎず、実際の神々の存在を前提としたものではないと、みんな了解しているのです。ですから、自分は多神教徒と言われる日本人に属しているが、神の存在は信じていないという、「科学的」日本人を自称する人がたくさんいるのです。

日本人は多神教徒であると断定し、自分たちは唯一神を信るという西欧のキリスト教国

の人々も、日本人と同じくらい多神教徒であることに気づかなければなりません。彼らには、名前こそ「神」ではありませんが、日本の神々に近い存在を信じているのです。日本人が神々の存在を信じていると言うなら、それよりよほど強く信じています。彼らには、唯一の神以外に魔法使いがいて、魔女がいて、妖精がいて、天使がいて、守護天使や守護聖人がいるのです。これらの役割は、日本人の神々よりは、よほど「神」なのです。また、日本の偶像を嘲笑する彼らの中にも、結構たくさん偶像があるのです。

ともあれ、日本人の感覚からすると、「神」とは、本当は存在しない神々の中の一つに過ぎず、キリスト教の神が唯一だとか絶対だとか、ほかに神はないなどと主張すること自体が、矛盾なのです。それは、日本語の「神」の定義から外れるからです。また日本人にとって、神という存在は、本来、低次元の空想の世界のものなのです。西欧キリスト教国の人々が、魔法使いや魔女や妖精を、おとぎばなしの世界のことと言い逃れる以上に、空想の産物なのです。日本人の多くは、このような理屈にはあずかり知らないとしても、感覚としての理解は共有しているのです。やはり、天地の創造者を「神」と翻訳したのは、まずかったのかも知れません。

Ⅱ．C．2．　汎神論

ところが日本人にはもう一つの神観があります。これが、多神教的神観とも重なり合って、複雑怪奇になっているのです。それは汎神論的神観です。つまり、すべての自然物、あるときは人造物にまで、神が宿っていると考えるのです。この場合の「神」は一人の神

か、多数の神々か明らかではありません。日本語では単数と複数の違いが曖昧なのです。あるときは複数の神々、それぞれ別の神が宿っているとも考えられ、他の時には、一人の神が様々な形をとって宿っておられると、考えられているようです。曖昧といえば曖昧なのですが、この曖昧さが非常に大切だとさえ言えるのです。

とにかく、日本人の多くが、すべてのものには神が宿っている、あるいは、神の性質が留まっていると感じています。そのような信仰は自然物崇拝につながり、最近はやりのエコロジーにも調和していきます。日本人が自然を大切にして自然と共に生きて来たのは、自然の中には人間の能力が遠く及ばない、神聖なものが宿っているという感覚があるためです。一般にはアニミズムの中で論じられる妖怪やお化けは、物に取り憑くものであるところから、そこには汎神論的感覚もあるのかもしれません。

Ⅱ．C．３．　一神論

さらに非常に興味深いことですが、日本人にはとても強い一神教的感覚があることに気づかなければなりません。この点については、日本人自身が自覚していません。西欧の学者たちも、西欧の宗教学を学んだ日本の学者たちも、あるいは神道の宮司たちもあまり考えたことがない分野であるかと思われます。

日本人の感覚には、さきにふれたように、「天知る地知る人知る」という場合の「天」の

感覚があります。この場合、単に普通の人より少しだけ高度な能力を持っているに過ぎない、「神」とはレベルの違う高い存在、異なった次元の存在です。それでいながら、人間に関わりを持つ存在です。

日本人の多くは、ここではとりあえず「天」と表現された存在、実際には何とお呼びすればよいのかもわからない、気高く、尊く、清らかなお方を、古の時代から心の奥深くで厳かに感じ、畏れ、敬い、祀り、礼拝し、様々な祭りを行って感謝を捧げてきました。昔から日本人も非常に宗教的だったのです。自分たちの生活のすべての面が、人間の力や意思がはるかに及ばない高いところにおられる方によって、支配されていることを感じてきました。稲がただ自然に育つのではなく、この「天」の恵によって育っていると感じて、ありがたいと思ってきました。台風や冷害を始めとする天災にあっても、自然を支配する「天」のご意思が背後にあると感じて、恨み言を言いながらも、全体的には自然の恵みに浴していることを思い、感謝を捧げてきました。あるいは、天災を「天」の配慮とすることに申し訳なさを感じ、ひとつ次元の低い「荒ぶる神」の存在さえ考え出しました。

日本人は、この「天」であられるお方と神々の間に、厳格な境界線を引いてきました。「天」であられるお方は、どのように表現したら良いのかさえ分からない、高く、遠く、気高く、貴く、かしこく、厳かで、清らかなお方です。人間の言葉ではどのようにしても表現できないお方です。それでも、日本人はこの「天」を何とか表現できないかと、いろいろな試をしてきました。ところが、限界のある人間の頭と限界のある言葉で表現

しようとすると、たちまち、あまりにも稚拙な神々が出来上がってしまいます。八百万の神々は言うに及ばず、記紀（古事記・日本書紀）に記された神話の中の神々のようになってしまいます。これでは、日本人が心から崇め、祀る「天」にはふさわしくありません。

ただ、何とか礼拝をし、感謝と祈りをささげる場を設けなければならないために、それにふさわしいと思われるところに神社や祠や社を築いてきました。でも、それらの神社には、「天」であられる方はいらっしゃいません。「ご神体」などという言葉はありますが、「ご神体」そのものがある神社はありません。「天」であるお方を象徴する、何かが仰々しく置かれているだけです。日本人は、目に見えず、手で触れることが出来ない「天」であられるお方を偶像化せずに、目に見えないまま、手に触れられないままにしておくことを選んだのです。それに比べると西欧の人々には、神に対する畏れが希薄です。たとえば、ミケランジェロは天地創造の神を初老の人間の姿に描いてしまいました。芸術としては見事であっても、神観としてはまさに低級下劣です。日本人はまた、神を言葉で説明することさえ畏れ、嫌い、さげすみ、避けたのです。これに比べると西欧キリスト教は、魚をまな板に乗せて切り刻み顕微鏡で調べてみるかのように、畏れも尊敬も遠慮も無く、神についてあれこれと説明します。これは聖書の信仰感覚ではなく、ギリシア思考の現れです。

日本人の「天」であられるお方は、偶像によって表現されないことを特徴としています。確かに、由緒ある神社には、それぞれ謂れがあり祀られている神々があります。ところが、そのような謂れや祀られている神々がどのような神であるかということについて、

興味を持つ者はありません。ほとんどの日本人にとって、そのようなことはどうでもいいのです。日本人は、どこの神社に行っても、そこに祀られている神がどのような神であっても、まったく同じ気持ちで同じように感謝を捧げ、祈りをささげます。

日本人にとって、それらの神々は、見ることも触れることも出来ない貴い「天」の仮の現われ、権化に過ぎないからです。権化に過ぎないとはいえ、八百万の神々の多神教的神とは異なるものです。ただ、そこに祀られている名のある神が、本来礼拝されるべき方ではなく、その背後におられる何とお呼びしてよいのかさえ分からないために、とりあえず「天」とお呼びするお方、あるいは「なにごとのおわしますかは知らねども」とありがたがられるお方こそが、礼拝と感謝と祈りをささげられるべきお方なのです。したがって、たとえどれほど多くの神々があっても、礼拝すべきお方はただ一人なのです。それも、仏教的な人格を持たない法（達磨）ではなく、知・情・意を持ったお方なのです。

日本人は、この目に見えず手で触れられない「天」が、日本を祝福し、四季を廻らせ作物を育て、豊かな食べ物を与え、穏やかに住まわせてくださっているお方であると感じ、皆で一緒に感謝をささげるために、折々に祭りを行ってきたのです。ただ、日本人の神意識は非常に曖昧で、霧にかすんだようによく見分けることが出来ないのです。実際、天であられる高貴なお方への感覚は、あらゆる自然物の中に宿っておられる神への感覚、汎神論的な感覚と矛盾しません。ただ、そこから神社に祀られている仮の現われの神々への感覚に降ろしてくると、かなり御利益本位の世俗化したものに変わりますし、そこからたやすく、

多神教の感覚に移り八百万の神々につながっていることも事実です。このあたりはさらに突っ込んだ学びが必要なことは言うまでもありません。ただその場合、西欧の感覚で作った物差で、日本人の感覚を計ることがないように気をつけなければなりません。

見方によると、日本人はキリスト在世当時のユダヤ人と非常に良く似た世界観を持っています。すべてのものを超越した「天」的な存在者を認め、その超越者とは次元が違い、力においても知力においても決定的に劣ってはいながら、多くの点で人間に勝った能力を持つさまざまな霊的な存在者を信じ、それらの力をそこかしこで感じながら生きているのです。それなのに、日本人は多神教を信じていると言い、ユダヤ人は徹底して唯一神を信じていると言うのには、納得がいきません。

ただ翻訳者たちが、聖書の全能者を「神」と訳したために、本来存在もしない、あるいは存在したとしても様々な霊よりも力が劣るものと、同列に置かれてしまったため、日本人は多神論を奉じていると言われるようになったのでしょう。

また、とても興味深いことに、この日本人が崇めてきた尊い唯一のお方は、「死」にはかかわりを持たないことです。元来、神道では死を穢れたものとして嫌って来ましたので、その汚れと気高いお方とを結びつけることを、避けているのかも知れません。

Ⅱ．C．４．　日本人と仏教

日本人の多くは、自分は仏教徒である言いながら、昔からの神道も受け入れています。日本人の精神的な土台といえば、大抵の人は神道であると言いますが、日本人の宗教はと問うと、仏教と答える人が多いかもしれません。神道は精神的な土台あるいは柱ではあっても、宗教としては、個人にも家庭にもあまり強い影響を与えていません。一方、仏教はというと、個人には観念的信仰、あるいは哲学的な瞑想や修行と言う面でわずかのかかわりを持つだけですが、家とイエには非常に強い影響を持っています。つまり、現在の親族関係という横の繋がりの「家」と、先祖との結びつきという縦のつながりである「イエ」を考える上では仏教の役割が非常に大きく、日本人の自己確認、いわゆるアイデンティフィケーションを持つための要となっています。

仏教は古来の神道が取り扱ってこなかった分野、空白だったところを上手に埋めて、役割分担をしながら共存してきました。神道はあまり個人生活や信仰には関わりなく、また、家族とか血族と言うものにも関心を示さず、地域社会、居住地域の共同体の宗教として存在してきました。それは「氏神」の観念にもっとも良く表されています。また神道では、死は忌むべきものとされて、死後の世界についてはほとんど何も語られていません。記紀などには、神々の死後の世界が陰府として描かれていますが、それ以上の発展はありません。

仏教は神道が避けていた死後の世界について、たとえわずかでおぼろげであったとしても語り、神道が扱えなかった先祖崇拝を通して、血族や親族について語ることが出来、

居住地域の共同体意識に、もう一つの共同体意識を持たせることに成功しました。

仏教が日本人に諦観を持たせ、侘び寂びの感覚を抱かせるようにしたかのように言われていますが、むしろ、古来の神道的感覚、素朴に自然を尊ぶ感覚が、仏教にも影響を与えて、そのような仏教観が生まれたと考えるほうがよさそうです。仏教はもともと金色と極彩色とを引っさげて日本に入ってきたものです。「青によし奈良の都は咲く花の」と歌われたとおりです。いま古びた仏像に侘びや寂びを感じている人たちは、その仏像はもともと金箔で覆われて、まばゆいばかりに光り輝いていたことを思い出してみるのがいいでしょう。仏教が入ってきたときの日本人は、仏教のきらびやかさに目を奪われたのです。

仏教は行く先々の宗教と交じり合って、その土地にあった新しい仏教を生み出すのを特徴としていますので、日本の仏教は諸外国の仏教と著しく異なっています。日本に来た仏教は積極的に神道を取り入れましたので、多くの神道的仏教、あるいは仏教的神道が生まれることになりました。いわゆる神仏習合です。そのため、一般の日本人には、仏教なのか神道なのか分からない宗教や風俗習慣がたくさんあるのです。仏教は神道の神々に、仏の権化、あるいは仏の使いとしての役割を与えることによって、融合共存を図ったのです。そこから日本でも、わずかではありますが、神々の偶像が作られるようになったのです。

現在多くの日本人が、自分は神道の信者だと言うよりも仏教徒だと言うのは、仏教が

死者の取り扱いや先祖祀りを通して、より宗教的な分野で日本人に接しているためだと思われます。その点、神道は地域の祭り以外に取り立てて言うべきものを持ちません。それでも日本人は、美しい山や川、海や湖、あるいは野菜や果物や穀物を与えられていることへの感謝の気持ち、さらには、生かされて入ることへの感動などを表現するとき、仏教的な感覚や行事では行わず、神道的感覚と行事で行うのです。

仏教はもともと死者を取り扱う宗教ではなく、どう生きるかと言うこの世の問題を取り扱う哲学として始まりました。それが今の日本では、もっぱら死者に関わる宗教になってしまっています。中には、禅宗のように生きている者への修行を重んじるものもありますが、一般日本人の感覚としては、仏教はもっぱら死者を取り扱う宗教なのです。

Ⅱ．D．　日本人の罪意識

「菊と刀」以来、日本人には罪の意識がないと言われ続けてきました。確かに、日本人はキリスト教の絶対の神のような存在を、倫理的な側面で明確な前提とはしていませんので、キリスト教で言うような「罪」の意識はないと言えるでしょう。そして、共同体意識の強い社会の中では「恥」の意識が強くなったと、言えなくもありません。

とはいえ、日本人に罪の意識がないと言い切るのは、西欧キリスト教的物差しで測ってのことであり、正しい分析とは思えません。日本人には日本人として、キリスト教の言う

罪意識に近いものが存在し、意識としては、キリスト教社会の罪意識よりも強烈であるとさえ、言えるところがあります。

「天地神明にかけて」という言葉があります。共同体の中では和を図ることが最善とされていることを知っていながら、自分の信念を曲げることが出来ない、自分が正しいと思う事柄をやり遂げなければならないようなときに、「天地の神々にかけて」あるいは天地の神にかけて、やるのだと言う意味でしょう。武家社会で、お家のために尽くすのが武士の役割と心得ていながら、どうしても自分の信念を曲げて武士の忠義を通すことが出来ないときには、決然と立ち上がる武士たちがいました。日本にも、「義を見てせざるは勇なきなり」と、己を捨ててでも義に立つ者がいたのです。

聖書を持たず、キリスト教のいう罪を知らない日本人は、自分の心が命ずる命令、信念の命ずるところをとても大切にし、あるときは共同体の中の和や、忠や義よりも上に置いていたのです。旧新約聖書をもち、罪の神学を心得ていた西欧の人々は、異邦人の、本能的に正しい生き方を求める自分自身、あるいは良心という問題を、正当に取り扱って来ませんでした。ところが、パウロによると、律法を持たない異邦人にとっては、この自分自身こそ律法であり、神の裁きの基準なのです。

パウロの短い記述では、律法としての自分自身と証をする良心との関係が不明ですが、現在のところ私は、律法としての自分自身は神に似せて造られた人間本来の聖い性質であ

り、良心とは、その聖い性質が環境や習慣や教育というような後天的な要素によって、具体的に現されてくる聖と義を求める性質と考えていますが、もっともっと多くの人たちの考察と思索が必要です。

日本人は、イスラエル人ではありません。紙に書かれた律法は与えられていません。しかし、自分自身を律法として持っているのです。この律法に照らし合わせて、自分が正しい人間ではないことを知っているのです。ところが、まだ日本語になり切っていないキリスト教感覚の「罪」という言葉で、あなたは罪人だといわれると、納得できないのです。日本人は、紙に書かれた律法によって裁かれる罪人ではありませんが、律法である自分自身によって、正しい人間ではないと理解している罪人なのです。

Ⅱ．E．　日本人の実利主義

アメリカ人は非常に実利主義的だといわれますが、日本人はさらにその上を行くのではないかと思われるほどです。日本人にとって、自分たちの生活に役立つものは、理屈はどうであれ良いものであり、自分たちの生活の邪魔になるものはとにかく悪いのです。自分たちの益になると判断すると、日本人は犠牲をものともせずに取り入れようとします。遣隋使や遣唐使は命の危険をもかえりみず、玄界灘の荒波を超えて進んだ知識を取り入れようとしました。外国との通商も積極的に進めました。鉄砲もどんどん輸入しただけでなく、自分たちで大量に製造するようになりました。当の西欧ではまだ実戦には用いられて

いなかったころから、日本では鉄砲隊が作られて実戦で大いに活用されていたのです。

日本人の実利主義は、特に宗教的な面で発揮されてきました。西欧諸国に限らず、多くの国、あるいは民族は、宗教のためにいのちを賭けた戦いをくり返してきました。しかし、日本人はわずかの例外を除いては、宗教にいのちを賭けることを愚かと考えたようです。宗教は人間の幸せに尽くすべきものであって、人間が宗教のために尽くすのではないと、昔から徹底しているのです。だから、仏教を取り入れるのが得策だと判断すると仏教を、キリスト教が役に立つと判断するとキリスト教を受け入れて、平然としていることができたのです。

ところがそのキリスト教の背後には、植民地主義があると見抜くと、たちまち熾烈な大迫害を起こして排除してしまいました。そのためには仏教をも利用しています。さらに明治になると、西欧諸国と肩を並べるために富国強兵を唱え、国家神道を精神的支柱にしようとして、こんどは仏教を弾圧します。国家神道は、キリスト教が西欧諸国の精神的支えであるように、日本にもそのような宗教が必要だと考えた為政者たちが担ぎ出したもので、要するに利用されたまでのことです。為政者たちは、西欧諸国が信奉しているキリスト教を、寛容な日本精神に合わないものとして退けました。西欧の進んだ文明は積極的に取り込みましたが、西欧諸国の植民地主義とそれに伴う非人道的な残虐行為を、背後から支えているがキリスト教だと見抜いたためです。そこで和魂洋才のスローガンが掲げられたのです。

歴史を見ると、日本では宗教とかイデオロギーとか言うもので国家が動いたことはありません。歴史の多くの場に宗教が顔を出し、かなり重要な役割を果たしてきたのは事実ですが、常に動かす側にではなく、動かすものに利用される側にありました。それは多くの国家や民族とかなり著しい違いです。日本人は、最大公約数的な日本人の益のために、幸せのために尽くすことが最大の善であると考えているのです。そのためには宗教も、場合によっては天皇家さえも利用されてきたのです。

Ⅱ．F．　日本人の共同体意識

日本人の特徴に、強い共同体意識があります。もちろんどこの国、どの民族にも共同体意識はありますし、かなり強固な意識として社会の構成要因となっている場合も少なくありません。ただ、日本人の場合は独特といえる性質と強固さを持っているのです

日本人の独特な共同体感覚については、すでにいろいろな場で語っていますので、今回は手短に述べるにとどめますが、日本人は良くも悪くも常に周囲の目を気にして生きています。「わが身をつねって他人の痛さを知れ」と言う思いやりの心は、良い面です。他人の迷惑にならないように生きようとするのも、良い面です。日本人ほど思いやりを大切にする人たちも少ないでしょう。でも、何を言うにしても何を遣るにしても、いつも周囲の人はどう反応するだろうか、周りの人たちにおかしく思われないだろうかと気に病んで恐れ、消極的になるのも悪い面です。

それはまた、よく言えば互いに助け合い協力し合って生きることに繋がり、悪く言えば互いに干渉し合い監視し合いながら生きるということに行き着きます。ですから当然、宗教もまた、欧米個人主義のキリスト教とは異なって個人の宗教とはならず、家の宗教、地域社会の宗教となります。家の宗教は仏教がその中心となり、地域社会の宗教としては神道がその役割を果たしてきました。日本人の多くが自分は仏教徒だと考えていますが、個人が仏教を信奉しているかどうかはあまり問われません。

また、すべての日本人は自動的に神道の信徒として数えられ、地域社会の神社の祭りには積極的に参加していますが、個人の信仰がとやかく言われることはまずありません。個人の信仰、個人の自由と憲法までも盾にとって主張しても、日本の共同体意識の中では公正なはずの裁判でさえ、勝ち目はありません。自衛隊員の合祀問題がその良い例です。日本人にとって大切なのは個人の信仰の問題ではなく、共同体の和を保ち強化する信仰なのです。日本人にとって最大の罪は、存在している共同体の和を乱すことです。

日本人にとって共同体とは、自分がその中に生まれ出たところであって、始めから存在するものです。後から自分の意思で参加したり脱退したりできるものではありません。そのあたりは、アメリカ人の感覚と鋭く対立しています。アメリカという国は、基本的に憲法に賛同した人々が力を合わせて築き上げたものです。人種とか言語とか文化というものには捉われずに、あくまで理想を追うのです。ところが日本はそのような理想を持ちません。

かえって日本人という血を大切にするのです。自分の理想は選ぶことができますが、血筋は選ぶことが出来ません。

Ⅱ．G．日本人の対キリスト教意識

福音を聞く者が、キリスト教に対してどのような意識を持っているかは、非常に重要な要因です。好意を抱いていると福音にも容易に耳を傾けますが、イメージが悪いと福音にも心を閉ざします。

Ⅱ．G．１．　初めての接触

日本人がキリスト教と接触したのは一五四九年、反プロテスタント運動のイエズス会宣教師、ザビエルが来日したことに始まります。イエズス会はそれまでの多くの修道会とは異なり、宣教地の文化に対する肝要な態度、ほとんど妥協と思われるくらいまで、宣教地の生活習慣やものの考え方を許容する宣教法を採りました。それだけ、宣教地の人々への洞察と理解も深まりましたが、特に日本人の高い道徳性と勤勉性をほとんど尊敬の念を持つほどに評価しています。

イエズス会の宣教師たちは、ある意味で気高いキリスト教精神をもって、積極的に病人や貧乏人の世話をして、日本人たちの心を掴んでいきました。また、当時の戦国武将たちは海外との貿易に目をつけ、宣教師たちを優遇しました。特に、まだ日本で鉄砲を生産で

きなかったために、鉄砲を入手しようと宣教師たちを優遇していました。

日本人は当時から非常に実利的で、自分たちに益になるものは何であれ、どんどん受け入れて行く気概に溢れていたようです。宣教師たちが教える隣人愛の教えは、日本人たちの共同体を強めるものとして歓迎されましたし、死んでも生きることができる天国の教えは、曖昧な死生観しか与えることが出来なかった神道や仏教よりも、ずっと魅力がありました。

ところが秀吉や家康は、スペインやイギリスの難破船の生き残り船員たちを通して、宣教師たちが植民地主義の手先とされていた事実を知るようになり、たちまちキリスト教に対する態度を硬化させてしまいました。これも日本人の実利性です。特に家康は日本に漂流したイギリス人のウイリアム・アダムス（日本名三浦按針）やオランダ人ヤン・ヨーステン（日本名耶揚子）を優遇し、彼らから、スペインやポルトガルが世界中で行っていた残虐な植民地政策と、カトリック宣教師たちの繋がりを聞き取ることが出来たのです。彼らはカトリック国ではなくプロテスタント国に属し、日本にたどり着くまでカトリック国のポルトガルとスペインの船に襲われて、５隻の船隊のうち２隻を失ってしまったために、恨みを募らせていました。それで、あることないことを家康に吹聴したに違いありません。これに対し、イエズス会の宣教師たちは、二人を早く処刑するようにと幾度も家康に訴えましたが、家康は無視して二人を優遇しています。

為政者たちは、カトリックの教えそのものを嫌ったのではありません。日本がカトリック化してスペインの植民地となることを危ぶみ、断じてカトリックを排斥することにしたのです。また日本という国は、古くから象徴的な力で日本を治めてきた朝廷と、武力という実権で支配してきた武家との、微妙な力のバランスの上に成り立ってきたのですが、ここに、カトリックの教えが入り、天主という絶対者が第三の勢力として参入すると、それまでの政治の均衡が失われて混乱をもたらすと考えられたようです。

さらに為政者たちがキリスト教を嫌いだしたのには、イエズス会に続いて来日した他の修道会の宣教師たちの、日本文化を軽蔑し日本人を野蛮人と看做すような態度にもあったと思われます。非常に勤勉で、新しいものを学び取る知恵と技術にも長けていた日本人は、わずかのあいだに自分たちで大量の鉄砲を作ることが出来るようになり、しばしば実戦でも用いるほどになっていましたので、もう外国から買う必要もなくなっていました。つまり、宣教師を優遇する理由がなくなったのです。

そこで、日本をカトリック国スペインから守るために、日本全土に及ぶ、大々的で熾烈を極めるカトリック狩りが行われました。このとき処刑されたカトリック信徒の数は、三十万に及ぶともいわれるほどです。また隠れたカトリック信徒を探し出しては排除し、新たなカトリックの信徒が生まれないように、上手に利用されたのが仏教でした。檀家制度、宗門帳、五人組などが作り上げられ、反カトリックの相互監視システムが完成させられる一方、カトリックに対するさまざまな悪評が流され、カトリックを怪しげなもの、面妖

なもの、危険なもの、ためにならないもの、反社会的なものと思わせることに成功しました。

このとき日本人の心には、キリスト教に対する拭い去ることができない恐怖心、猜疑心が植えつけられたのです。特に、一人のキリシタンの存在が、彼の属する共同体全体を危険に陥れたという事実は、個々の日本人と言うよりも、国民的な恐ろしい記憶となって留まりました。現代に生きる日本人は、そのような事実があったということさえ知らないかもしれませんが、なぜか、キリスト教は怪しげであり反社会的であるという、底知れない恐れを持ち続けていることが多いのです。時代劇に登場するキリシタン・バテレンの役割などを見ると、それが良くわかります。

Ⅱ．G．２．　二回目の接触

日本人が再びキリスト教と接触したのは幕末から明治にかけてです。当時の日本人は、指導者たちから大衆にいたるまで、諸外国に対して強い猜疑心を抱いていました。二百五十年ほども昔の反キリスト教政策が、まだまだ根強く継続していたからです。日本が「キリスト教を解禁したのは、開国から十九年も過ぎた明治六年のことです。明治政府もキリスト教を「邪宗門」と看做して警戒し、厳しく禁止していたのですが、諸外国からの圧力に抗しきれず、キリスト教を容認することになったものです。

Ⅱ．G．２．ａ．　為政者たちによってキリスト教だけが拒絶された

実利性に長けていた日本は、政治、軍事、産業、教育など、あらゆる分野で進んだ西洋の文明をどんどん受け入れようとしましたが、キリスト教だけは拒絶したのです。諸外国の圧力によって、キリスト教の宣教を認めざるをえなくなったとしても、為政者たちは「和魂漢才」をパロディ化した、「和魂洋才」というスローガンを掲げて、これに対峙したのです。このころ日本に目を向けていた諸外国は、みな「キリスト教国」で、すべて強烈な植民地政策を進めようとしていたのです。先のポルトガルはすでに力を失い、スペインも凋落の道をたどりつつありましたが、プロテスタントのイギリス、オランダ、アメリカ、カトリックのフランス、カトリックとプロテスタント半々のドイツ、東方教会の流れを汲むロシア正教のロシアなどが日本と接触し、虎視眈々と隙を覗っていたのです。

こうしてキリスト教との二度目の接触は、一度目の接触がもたらした「植民地政策の手段」という望ましくないイメージを、為政者たちに再確認させることになってしまいました。日本にとって幸いだったのは、最初に日本と接触し日本の開国のきっかけとなったアメリカが、すでに他の多くの地域で植民地政策を進行させていて、日本にまで触手を伸ばす余力が無かったことです。このために、他の国々も、アメリカの手前、日本に対して強力に植民地政策を進められなかったのです。

それでも、少し前のアヘン戦争で中国を実効支配していたイギリスは、日本に対しては生麦事件をきっかけに薩英戦争を起こし、まさに「あわよくば」と植民地化の機会を狙っていたのです。明治初期の日本の為政者たちが、これらの国々の精神的支柱になっていた

キリスト教を嫌い、これを排除しようとしたのは、当然と言えば当然でした。為政者たちは世界を見聞し、これら植民地主義者が世界中で行っていたことをよく理解していたのです。

Ⅱ．G．２．ｂ．　一般大衆から疎まれたキリスト教

日本が開国したときやって来た多くの外国人は、ほとんど植民地主義の意気の盛んな人々で、かなりの数の宣教師も含まれていました。中には植民地主義と関わりのない宣教師たちもいたはずですが、知らず知らずのうちに利用されることが多かったのです。また、純粋に福音のためにと思ってやって来た宣教師たちの中にも、実際には、単に冒険が好きだとか、教会の中で賞賛を受けたいだとか、不純な動機が含まれていました。

特に悪影響を及ぼしたのは、当時アメリカやイギリスで流行っていた、文化的使命感の遂行です。自分たちの文化こそ世界最高のキリスト教文化で、これを広めて世界をキリスト教化して理想的な世界を作り上げ、再臨のキリストを待つのだと言う、千年期後再臨説に立つ人たちの、キリスト教文化の優越感に立つ文化侵略でした。彼らは始めから宣教地日本の文化は劣っていると言う前提でやってきて、日本の文化を取り除き、「優れた自分たちのキリスト教文化」を定着させることに、情熱を傾けたのです。

このような宣教師の態度に傷つかない日本人は稀でした。自分たちがその中に生まれ呼吸をして来た文化を、あしざまに言われて喜ぶ人はいません。日本人たちは宣教師たち

のもたらした高度な文明には、羨望の眼差を向けましたが、文化に対する高圧的な態度には憤りを感じたのです。昔から「郷に入らば郷に従え」と言われ育った日本人が、異国から遣ってきて日本に馴染もうとしない宣教師たちを、和を乱すもの、はみ出しもの、為にならないものとして警戒し、自分たちの仲間に入れることはまずありませんでした。

全世界に福音を伝えると言う宣教師本来の使命に、この文化的優越感に立つ使命感をあわせ持っていた宣教師の多くは、非常に高圧的な態度で、良く学びもしないまま日本の文化や宗教を軽蔑し、嘲笑し、糾弾したのです。そのような宣教師に触れた多くの庶民たちは、自分たちもなぜか知らずに抱いていたキリスト教に対する面妖なイメージが、誤りでなかったと確信したのです。

Ⅱ．G．２．ｃ．　持ち込まれた「キリスト教文化」

欧米の宣教師たちが「キリスト教文化」として持ち込んだもので、日本の文化と衝突を起こしてして、福音宣教の妨げになったものにはいろいろありますが、三つの代表格のものを挙げておきましょう。もちろん、それらが「彼らのキリスト教文化」ではあっても、聖書の教えではないことは断る必要もないことでしょう。

その第一は個人主義です。個人主義が良いか悪いかの問題ではなく、強い共同体志向を持ち、習慣も、思考方法も、自己確認（アイデンティフィケーション）も、家庭でも学校で

も職場でも地域社会でも、あるいは国家さえも、すべて共同体という枠内で動いていた日本に、個人の重要性と個人の自由を主張する個人主義は、様々なところで衝突を起こしました。この個人主義はあるときは民主主義と結びつき、近代的な進んだ考え方としてもてはやされたりしましたが、いまだに日本の社会に定着できないでいます。定着したのは、昔からあったわがままを正当化する理由としての個人主義、利己主義です。

宣教師たちは、この個人主義を「キリスト教文化」として、福音と不可分のものとして持ち込みました。「神が創造されたのは個々の人間であって、社会はその人間が造ったものである。救いは個人の信仰、個人の決断によるものであって、家族のものでも、会社のものでも、国家のものでもない」と言うわけです。「信仰は個々の人間と神との関係であって、神と自分の間に何ものをも置いてはならない」というのは、欧米人宣教師たちがくりかえし教えたことです。そしてそういう前提に立って、個人的信仰を妨げる一切のものを悪として糾弾したのです。日曜日に礼拝会に行かせなくする、学校行事も家庭の計画も地域社会の行事も会社の仕事も、個人の信仰の自由を妨げる悪となってしまいました。

つい何年か前まで、日曜日に学校行事を行うのは、生徒の日曜礼拝会出席を妨げるもので、憲法で定められた信仰の自由に反すると言う訴訟が行われていた通りです。家族の都合も会社の都合も地域社会の都合も後回しにして、自分の信仰を第一にする個人主義のキリスト教は、反社会的な宗教として嫌われるようになったのです。日本人の多くは、幼いころから「何をやってもいいけれど、他人の迷惑になることだけはするな」と言い聞か

せられて育ってきたことを、思い出すべきです。

第二の問題は、なんでも白黒と善悪で判断する「キリスト教文化」です。まるで灰色などは存在しないように論じ、善にもなり切れず悪にも徹しきれない人間性など、あり得ないかのように決着をつけようとします。

定住性の低い生活の中で築き上げられてきた欧米文化では、思いやりに代表されるような曖昧な社会生活はあまり発達しませんでした。なにごとも誤解の無いように、その場ではっきりと語るのが欧米の文化です。彼らはそれをキリスト教の文化だと信じて、必ず「『はい』ははい、『いいえ』はいいえと言いなさい」と教えられたキリストの言葉を、意味を取り違えて引用します。（この意味は前後関係をよく読むと、簡単にわかるはずですが・・・）

日本人は非常に強い定住性文化の中で、他人に対する気遣いを非常に大切にして、物事をはっきり言わないことを本分としてきました。いい悪いは別として、「見ざる聞かざる言わざる」の文化です。日本人にとって善か悪かの決着よりも、社会の和が大切なのです。和と言う最も尊いもののためには、少々の悪には目をつぶり、正義の矛先をあえて鈍くすることも出来、三方一両損などという話が通じる世界なのです。

欧米人は絶対善の神と、絶対悪の悪魔を両極端に置くだけでなく、人間社会まで絶対善

と絶対悪で判断しようとします。日本人は、絶対善も絶対悪も信じないで、すべて灰色の中で相対的に判断します。日本人の社会生活は妥協を旨とし、和解を理想とします。たとえ喧嘩をしても、大抵は最後まで争い続けるのではなく、調停者を探し出し、「俺も悪かった」と言って、人間関係の修復を図ります。欧米の社会では善か悪かを求めて最後まで争い、裁判まで行って決着をつけたがります。そのような性格を帯びた宣教師たちの姿を、日本人は偽善者として懐疑の眼差で見、和を損なうものとして蔑み、親しいお付き合いは避けるようになります。

第三は他の宗教に対する敵対意識です。西欧の宣教師たちは、異邦人に対する神の取り扱いについて、まったく誤解していました。その誤解は今も続いていますし、世界中のほとんどのクリスチャンたちがその誤解を何の疑いも無く受け入れ、異邦人の未信者に対して間違った態度をとっています。それは、律法が契約の民であるイスラエルに与えられたものであって、異邦人に与えられたものではないにもかかわらず、異邦人を律法によって裁く間違いです。イスラエルの法律で日本人を裁こうとしているのです。その中でも特に大きな弊害をもたらし続けているのが、他宗教に対する取り扱いです。宣教師も、宣教師に教えられた日本人牧師たちも、キリスト教以外の宗教は絶対の悪、最大の罪と断定し、偶像礼拝だと激しく非難します。

宗教は、神に似せて造られ、神と心を通わせることによって深い幸せを感じるように造られている人間が、神から追放されてしまった後でも、どうしても神を求めないではおれ

なかった本能的欲求の表現なのです。聖書の中に、異邦人が自分たちの宗教を持っていること自体を、神が責めておられると言う例はひとつもありません。生まれたばかりの赤子が乳を求めるのが本能であるように、人間が神を求めるのは本能なのです。ただ、神を見失っているために、神以外のもので埋め合わせをしようとしているだけです。お腹をすかせている赤子が指に吸い付いているようなものです。赤子に吸い付く本能が無かったら、どのようにして乳を飲ませたら良いのでしょう。人間に宗教心が無かったら、どのようにして神を礼拝することを教えたらよいのでしょう。

偶像礼拝を禁じているのは律法です。その律法は契約の民に与えられた契約です。契約の民は偶像礼拝禁止の律法を受ける前に、いくども神の自己啓示と奇跡のみ業を見せられ、奴隷生活から救い出され、この神だけを礼拝するように命令をされたのです。奴隷生活から救われたことも無く、神の明確な自己啓示も受けていない日本人、契約の民ではない日本人に、その律法を直接適用してはならないものです。律法の精神、その本質は理解できますし、それを守ることは結構ですが、異邦人には要求されていないのです。それなのに、どうして、日本人は偶像礼拝の罪を犯していると非難され、あらゆる宗教が揶揄と罵倒と嘲笑の的となり、糾弾の矛先にあげられなければならないのでしょう。

日本人は、宗教心と言うものを非常に尊いものとして、大切にします。たとえどのような神でも、宗教心の現われとして尊重し、よほどの道徳的な誤りや反社会的な教えを含まない限り、嘲笑したり罵倒したりはしません。日本では昔から、異なる神々が仲良く

存在できる文化だったのです。日本人にとって神は、単に人間よりいくらか高いだけの存在に過ぎず、絶対の神、究極の力と権威とを持つ神などは、それこそ神の部類に入らない、神以上に尊い存在で、神と呼ぶことさえはばかられたのです。日本人は多くのキリスト教徒が偶像礼拝者であるほどには、偶像礼拝者ではないのです。

それにもかかわらず、宣教師たちはすべての宗教をあしざまに言い、偶像礼拝だと罵りあざ笑い、侮辱したのです。そして、宣教師たちに教えられたすべてのクリスチャンがそれに倣っているのです。これでは、キリスト教が日本人に受け入れられることなど、あり得ないのです。

Ⅱ．G．３．　日本人に受け入れられているキリスト教

キリスト教は日本人に疎まれてばかりいたのではありません。実際、自分が宗教を選ぶとするならばキリスト教であると答える日本人が、圧倒的に多いのです。それは、いまだにキリスト教が西欧諸国の進んだ文明と結びつけられていたり、高い教育や社会福祉あるいは公共精神などと、関係付けて見られたりしているからです。

日本に入ってきたキリスト教は、千五百年代のカトリックをも含めて、福祉や教育に熱心でした。現在でもキリスト教関係の教育機関は幼稚園から大学まで、枚挙に暇がありません。病院や福祉施設なども、キリスト教の得意とする分野で、多くの宣教師たちが

これに携わりました。この教育と医療と社会福祉に見せられた愛の精神は、多くの日本人の感動と共感を呼んでいます。また、キリスト教の高い倫理性は、倫理観に優れている日本人に歓迎されました。

ただし、このようなキリスト教に対する高い評価は、日本人がクリスチャンになるための力、あるいは充分な動機とはなりきっていません。高い倫理性は、理想としては結構だけれど、実際の生活は「清き流れに魚住まず」で、むしろ疎ましいものです。どれほど清い生活でも、家庭も職場も地域社会も退ける個人主義のクリスチャン信仰は、和を重んじる日本人には反社会的な行為で憎むべきものなのです。孤高の清さに生きるよりは、少々泥にまみれていても皆と仲良くすることのほうが、よほど大切なのです。神がお求めになるのは犠牲ではなく憐れみです。

Ⅲ.　これまでの宣教方策を考え直す

非常に大切な第三点は、聖書が本当に教える福音を、日本人に分かりやすくまた受け入れやすく語る努力をすることです。

Ⅲ．A．　聖書的な神学を構築する

私たちが、欧米からの宣教師や神学者たちから学んだ聖書解釈や神学の多くは、聖書の教えに立つものではないことは、すでに述べたとおりです。教父の時代から宗教改革に至

るまでの時代、聖書の数はクリスチャンと言われる人々に比べて圧倒的に少なく、ごくわずかの特別な人々以外、手にすることができなかったのです。ですから、その当時構築され発展させられた神学の多くは、無聖書の神学でした。中にはまさに英知の結晶で、聖書から見ても立派な神学もありますが、多くは非聖書的であり、反聖書的でさえありました。

プロテスタントが聖書の権威を掲げて出現したとき、教会の権威や教皇の権威ではなく聖書の権威に立つと宣言し、何につけても「聖書、聖書」と言い続けたのですが、実際のところ、教皇の権威に対抗するために聖書の権威を持ち出したと言う側面があり、本当の意味で聖書を理解し、聖書の権威を語ったのではないとも言えるのです。なにしろ、ウイッテンベルグの印刷機が最初に聖書を印刷し始めたとはいえ、聖書の数はまだ圧倒的に少なく、多くの人が手に取ることができる状態ではなかった上、大冊の聖書を短期間に調べて学ぶことも困難だったのです。

Ⅲ．A．１．　西欧神学からの脱却

そういうわけで、いまや遅きに失することではありますが、私たちは西欧神学から脱却しなければなりません。それは、①無聖書の神学からの脱却であり、②無聖書神学の後遺症からの脱却であり、③西欧の文化感覚で理解さし、西欧の文化に馴染むように構築された神学からの脱却です。

教父時代から宗教改革に至るまでの神学を学ぶことも、古典を学ぶと言うことで無益ではありません。当時の人々の英知を知ることも有益です。それらが歴史の中で果たしてきたことを評価するのもよいことです。しかし、私たち聖書を神の言葉と信じる者の立場からすると、その価値は非常に小さなものです。それを私たちの信仰に役立てようとすると、むしろ非聖書的なものとなり大きな害を及ぼします。

また、宗教改革以後のプロテスタント神学も、先に触れたようにカトリックの無聖書神学から脱出しきっておらず、多くの点で非聖書的あるいは反聖書的です。それらのなかで、特に大きな影響を及ぼしているのは、聖書をギリシヤ的感覚で読み、ギリシヤ的感覚で神学を構築したことです。西欧の神学全般に言えることは、「知を求め学を追求する」科学になり、自分たちの知りたいことを聖書から学び取る学問になっていることです。聖書が何を語り、何を伝えようとしているのかと言う、最も大切な点に思考が及んでいないことが多いのです。

聖書を大切にすると言って、用いられた言葉の微に入り細に入りを、重箱の隅をほじくるように学ぶのが西欧の聖書の学び方です。それもあってもいいのですが、それはいくら一字一句が誤りのない神のことばだとしても、聖書の、特に旧約聖書の性質には合わないやり方です。

現代の私たちは、聖書は読まれるべきものであると考えます。しかし、本当は、聖書は読み聞かせられるべき書物なのです。たとえば、旧約の律法の書は誰でも手にすることが出来る書物ではなく、始めはユダヤ民族全体に一巻しかなかったのです。何千何万という

大勢の人が集まったところで、指導者が大声で読むのを、少し離れて立っている者が聞いてそのままくり返す。それをまた少し離れた所に立つものがくり返し、順々に大勢の者が聞けるようにしていたのが、古代の方法でした。それは何処の国でも同じだったようです。キリストの説教もそのようにして、大勢の者に聞かれたのでしょう。ペンテコステの日にペテロが立ち上がって説教を始めましたが、他の十一人の使徒たちも共に立ち上がったと記されているのは、そういう意味です。

ですから、聞いて覚えることを前提にして、聖書は書かれているのです。おのずと、書き方も、単純で理解しやすく、また記憶しやすく、印象深く書かれているのです。それを理解しないで、何冊もの聖書を机に置き、一点一画もないがしろにせず、言葉の正確な意味を調べ、多くの文献をあさりながら読むのは、本来、記者が想定した読まれ方ではないのです。また、たとえ一字一句間違いのない神の言葉だとしても、聖書は完全な書物ではないことも理解すべきです。不完全な人間の不完全な、発達不良の言葉で、深遠崇高な神の姿とその教えが記されているのでから、決定的に不充分、不完全なのです。

さらにここ数百年、聖書は個人主義の感覚で読まれ、解釈されてきました。ギリシヤ的な個人主義がルネサンスで復活し、フランス革命で強化され近代ヨーロッパの哲学となり、さらにアメリカに行って花を咲かせました。私たちが受けたプロテスタントの福音は、近代個人主義と混ぜ合わされた福音です。そのために、私たちの聖書の読み方も神学も個人主義的になり、家族とか、先祖とか、親戚とか、地域社会とか、あるいは国家と言うも

のを無視した信仰になっています。それは、日本のような共同体感覚の強烈な社会では、大きな弱点です。

共同体感覚がないために、聖書が教える共同体、キリストの命によって造られ、聖霊の内住によって実現するキリストの体、教会についての神学が決定的に脆弱なのです。そのために私たちの教会は本来のあるべき姿から遠く、福音を信じた信徒が正しく成長することも出来ません。

Ⅲ．Ａ．２．　異邦人のための神学の確立

欧米人もその大部分は異邦人です。しかし彼らの多くは、自分たちが異邦人であるという事実をあまり真剣に考えたことが無いようです。 数百年、あるいは千年以上にわたって、キリスト教を自分たちの宗教としてきたために、たとえ、学問としては、自分たちが異邦人に分類されると知っていたとしても、感覚としては異邦人ではなかったのです。

Ⅲ．Ａ．２．ａ．　人間について学ぶ

いま私たちが真剣にしなければならないことは、まず自分たち人間についての学びです。「神に似せて造られた」あるいは「息を吹き込まれた」とは、どういう意味なのかということです。西欧プロテスタント神学の中でも、私たちに大きな影響を与えているカルビン主義の教えによると、人間は完全に堕落していて、良いものは一つも残っていないそうです。自分の力では神を求めることも神を見出すことも出来ないのだそうです。そのような

堕落の強調にも良い点があるのは認めますが、はたしてそれは聖書から見て正しい考え方かと言うと、それはむしろ無聖書の後遺症で、人間の思考力に頼りすぎた神学です。聖書全体の記述を公平に取り扱ってはいません。

たとえ堕落の後、神によって追放された後であっても、神に似せて造られた人間の性質が、完全に破壊されたとか、失われてしまったとか言うのは、聖書の教えるところではありません。ところが神から追放された人類は、ことごとく悪に染まってしまい、良いものは何も残っていないかのように考えるために、異邦人たちの宗教も、文化も、風習や習慣も、すべて悪いと断定してしまい、それ以上学びを深めようとはしなかったのです。そして、その堕落しきった人間が救われるためには、神の先行恩寵が必要であり、聖霊の働きかけが必要であるという、べつの側面が強調されたのです。

堕落の後にも、神に似せて造られた本来の人間性が残っているとすると、様々な宗教の多くも、神を見失ってしまった人間に残っている神との交わりを願い求める人間性の現れであり、たとえ間違った宗教であったとしても、人間の宗教心そのものを非難し、宗教そのものを非難するのは間違っていると言わなければなりません。神の明確な自己啓示と疑うことが出来ないほど確実な救いと助けを受け、神との契約関係に入ったイスラエルが偶像礼拝をすることは大きな罪なのですが、異邦人が偶像礼拝をすることはそれと同じ意味で罪なのではないのです。

ローマ書一章で、パウロは人類全般の偶像礼拝の罪を責めていますが、人間の宗教心を責めているのでも、宗教を非難しているのでもありません。彼らが神の栄光の姿を偶像に代えてしまったことを糾弾しているのです。パウロは、堕落した人間が神を知ることができたはずであると語り、神がご自分について知り得る事柄を、自ら明らかにしてくださったと言っています。それなのに人間は神を正しく知ることがなかったのです。それで神はこの世の知恵を愚かなものとし、この世が自分の知恵で神を知ることが無いようにされ、宣教の言葉の愚かさを通して、この世を救うことに定められたのです。（Ⅰコリ 2：20～21）

Ⅲ．Ａ．２．ｂ．　異邦人と律法との関係を学びなおす

西欧神学は、私たち日本人にとって致命的な欠陥を抱えています。それは異邦人についての神学が曖昧なことです。私たちはイスラエル人ではなく人異邦人なのです。異邦人に対する神の取り扱いについて、もっとしっかりとした理解を持たなければ、本当の意味での異邦人伝道は困難です。

必要なのは異邦人の神学と言うより、むしろ、神の人類一般に対する取り扱いについての、理解であると言ったほうが良いかもしれません。なぜなら、神が創造なさったのはイスラエル人ではなく人類であり、神が救おうとなさったのはイスラエル民族ではなく、人類だからです。イスラエルはその目的のために選ばれた器に過ぎません。それなのに、私たちは神が選びの器をどのように取り扱われたかと言うことと、選びの器に対する律法を

一所懸命に学びながら、人類一般に対する神の御心、神のお取り扱いを軽視しているのです。

まず私たちは、人類が神に似せて造られたという事実をしっかりと確認しなおすことです。人類はもともと、神に似た霊的本質を持つ者として創造され、神の愛の対象として神の愛を受け、また神を愛するものとして造られています。人間が神との交わりを持とうするのは、人間がそのように造られているからです。人間は、神との交わりを持たない限り、人間本来の喜びと感動、あるいは充足感、満足感と言うものを持つことが出来ないのです。

また人間には、神に似た聖い性質が与えられています。聖さを愛し、正義を追及する心です。さらに美しいものを愛し、汚いものを憎む性質です。昔から日本では中国の教えに倣って、性善説と性悪説の二つを学んでいます。理屈としてはどちらに軍配を上げることもできませんが、基本的に、日本では性善説が好まれ、性善説にのっとった社会形成がされています。それは、神に造られたときの人間の姿を、人間の基本的姿と見ているようなものです。

ところが聖書によると、人間は悪魔の誘惑に負けて神のもとから追放され、悪魔の支配にくだり、堕落した存在になりました。先に触れましたように、カルビン主義の神学によると、この堕落は完全な堕落であって、あたかも人間には良いものは一つも残っていないかのように教えられます。神の側からの働きかけがなければ、人間は神を求めることも救い

を望むこともできないとさえ言われているのです。確かに人間の堕落は徹底した堕落で、神の愛を受けるには絶対に相応しくないものになってしまいました。人間に相応しいのは滅びだったのです。

ただし、神から与えられた人間性、すなわち神に似せて造られた姿は、罪のために神から追放されたとき、すべて失われてしまったのではありません。神との交わりを慕う心、聖いものを尊び、正しさを求める心が、完全に消えてしまったのでもありません。罪によって追放された人間は、依然として神の姿を留めているのです。神を慕う心は、人間の宗教心として表現されてきました。たとえ、神についての理解が薄れおぼろげになってしまい、その宗教には正しい神の姿が映されておらず、偶像教になっていたとしても、人間は神の存在を本能的に知っていて、それを前提に生活をしています。歴史上何時の時代を切り取っても、またどの民族、どの国家を取り上げても、必ず宗教がありました。人間は神を礼拝しないでは満足できないために、宗教を作り上げたのです。

ここで、人間の作り上げた宗教は、神の刑罰の対象になる罪か、あるいは神に許していただける人間性の発露なのか、正しい判断をしなければなりません。宗教は人間の堕落の結果であって、それ自体刑罰の対象になる罪と断じるには無理があります。それは罪の結果の誤りであって、罪そのものではありません。赤子が間違って母親の乳首の代わりに、親指まで吸ってしまうようなものです。大切なのは、誤って指をしゃぶってしまったことではなく、乳を吸うことが出来る本能が与えられていて、正しく教えられさえすれば、乳を

吸うことが出来るという事実です。

私たちはいま、あらゆる宗教を偶像礼拝として糾弾してしまいますが、糾弾されるべき偶像礼拝は、「こっちがお母さんのおっぱいだよ」と教えられ、鼻先におっぱい持ってきてもらっただけでなく、口の中に含ませてさえもらったのにそれを吐き出して、かたくなに指に吸い付いている、イスラエル人の偶像礼拝なのです。お母さんのおっぱいを教えてもらってはいない、おっぱいを鼻先に持ってきてもらったことも、口に含ませてもらったこともない異邦人が、イスラエル人と同じように厳しく責められることはないのです。ですから私たちは、異邦人の偶像礼拝を、イスラエル人を責めている聖書の言葉を持って責めることは、直ちにやめなければなりません。

アテネで語ったパウロは、アテネ人たちの宗教心を罪として糾弾してはいません。彼らの信仰心を罪として断じてはいないのです。また、偶像礼拝にしても、ユダヤ人を責めるのと同じ口調で責めてはいないのです。それはむしろ理性的に考えても愚かであり、受け入れられないことであることであると説明し、そのような神に対する理解や宗教的習慣を改め、造り主であるお方を信頼するように勧め、また、み子キリストを信じるように励ましているのです。

いったいどれほど多くの異邦人が、自分たちの信仰心と宗教をイスラエル人に対する基準と言葉で責められたことによって、福音に対して心を閉ざしてきたことでしょう。特に自分たちの宗教心とその表現に、強い誇りと愛着を持ってきた日本人は、異邦人とイ

スラエル人との区別が付いていない欧米の神学によって、激しく躓いてきたのです。

私たちは日本人の宗教心を軽蔑し、日本の宗教をあしざまに笑うことをやめて、日本人の宗教心の篤いことに尊敬を持って接するべきです。そして、そのような宗教心を持っていながら、多くの民族や国家のように、あるいはカトリック教やカトリックの国々のように、偶像礼拝には陥っていないことを、大いに高く評価すべきです。そして、そのような日本人の宗教心、またその宗教心の表現の中に、たとえ不完全で曖昧でおぼろげであっても、聖書が教えている神観、聖書が教えている礼拝態度、聖書が教えている倫理観などに近いものを見出し、その共通性を土台として、聖書の教えを福音として伝えていくべきです。これまでの欧米型のキリスト教の遣り方では、聖書の教えは福音ではなく、裁きの宣告であったことが多いのです。

アテネにおけるパウロは、日本人の宗教感覚からしてもかなり幼稚というか下劣と言うか、聖書が教える信仰、聖書が教える神とはあまりにもかけ離れたギリシヤ人の宗教や信仰を非難せず、かえってそれらの中にわずかに残っている聖書の信仰との共通点を探し出して語り、それを共感に高めて、福音を紹介する手だてとしようと試みています。私たちは、日本人に対して、パウロと同じ心遣いをすべきなのです。

パウロはまた、「律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行いをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです」と語っていま

すが、これはいったいどういう意味でしょうか。パウロは続けて、「律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています」と語り、「彼らの良心もいっしょになって証」すると教えています。ただしパウロは、律法の無いものは律法なしに救われるとは語っていません。律法なしに滅びると教えていることを確認しておきましょう。滅びるから、福音を伝えなければならないのです。

パウロの言っていることの意味が、充分明らかにされているわけではありませんが、少なくても、律法を持たない異邦人が、イスラエル人に与えられた律法によって裁かれるのではないと言うことだけは明らかです。また異邦人も、心の中に律法の命じる行いが書かれているということですから、人間の中の神に似せて造られた部分が、悪魔の支配の中に生きて来ても消し去られてはいないことが分かります。それは律法を持たない異邦人である日本人の中にも、イスラエル人よりよほど立派で良心的な人もたくさんいた事実を認めさせ、日本の文化の中にも、「西欧キリスト教文化」より秀でたものがたくさんあり、はるかに勝った部分もあると言うことを示すものです。

さらに律法を持たない異邦人は、律法を持つイスラエル人と同じように裁かれるのではないことも明らかですから、キリストがご自分に敵対するパリサイ派やサドカイ派の人々に対して、あるいは律法学者たちに向けて語った厳しい裁きのお言葉が、日本人に適用されるのでもないということも明らかです。

とは言え、間違いが無いように、ここで加えておかなければなりません。たとえ人間には、神に似せられた姿がまだいくらか残っていたとしても、人間は決定的に堕落し、聖い神にはふさわしくなく、神の聖さに打たれて滅ぼされるのが当然なのです。私たちの救いはあくまでも、神の大きな愛と憐れみによるのであって、私たちの内に残っている神に似せて造られた性質の故ではないのです。

Ⅲ．Ａ．２．ｃ．　信仰による救いの理解をただす

さらに、日本人が救われるのも「信仰による」と言うことを、もっと明確にまた確実に伝えていくことが大切です。そこにはまず。「信仰」という訳語の問題があります。「信仰」にはそれなりに良い意味があります。しかしこの中には日本人独特の宗教的観念論が含まれています。「信じればある。信じなければない」と言う感覚です。私たちの信仰はそのような観念論とはまったく無関係の、事実に立脚するものです。この場合の事実は物事の事実ではなく、天と地を創造されたお方が実在しておられるという事実であり、このお方を信じて頼るという意味ですから、「信仰」よりむしろ「信頼」と言うほうがよいでしょう。私たちは自分の親を信頼しますが、信仰はしません。金を貸してくれる銀行は信頼しても、信仰はしません。私たちを救うのは観念的な信仰ではなく、具体的な信頼です。神は信頼されることをこの上なく喜んでくださるのです。

神に似せて造られた人間もまた、信頼されることを非常に喜び、大切にします。たとえどんな悪人で、極悪非道の人でなしであっても、まったく力のない者に信頼されると、そ

の信頼に応えてやろうと言う気も起こります。「窮鳥懐に入らば猟師もこれを撃たず」です。そのような気持ちの大本である神は、信頼されることを何よりも貴重なものとしておられるのです。

ところで、救いは行いに拠らず「信頼」によるという事実を、パウロが明らかにしたとき、彼はその証明を律法の解き明かしによって行うことは出来ませんでした。律法が与えられたときより五百年も遡り、アブラハムの物語から証明したのです。もちろん、アブラハムの救いも、律法によって予表され、律法によって道を備えられ、律法の完成として十字架に架けられた、キリストの贖いの働きによるものです。しかし、アブラハム自身はキリストのことなど、一切知らずに、キリストによって救われたのです。つまり、イスラエルの父であったアブラハムの救いは、律法が与えられる前の救いであり、律法を与えられていない異邦人と同じ状態で救いを得たのです。

現在私たちが教えられ信じている救いは、一言で言うと、「イエス・キリストが私たちの罪のために十字架に架かって死んでくださった」と、信じるならば救われるということですが、それは教理の受容、福音の理解という行いによる救いです。イエスと言う人物をキリストと認め、このキリストが罪の贖いを成し遂げてくださったと信じるならば救われるというのは、まさに、旧約聖書の背景を持ち、ユダヤの歴史と文化を知っていることを前提にしたものです。現在の日本人には、そのような理解を求めること自体が、理解と言うかなり困難な行いを要求するものです。西欧の福音では、福音の理解なしには救われ

ないのです。自分の罪の理解、滅びに定められた自分の理解、悔い改めの理解が無ければ救われないのです。もっぱら頭の行いが無ければ救われない、行いによる救いです。

でも聖書の福音は、私たちがキリストというお方を信頼しさえすれば、あるいはキリストを遣わしてくださった父なる神を信頼すれば、それだけで救われるのです。キリストが私たちの罪の贖いのために十字架にかかり、死んで甦り、今も生きていてくださったという事実はこの上なく重要で、それをしっかりと知るべきですが、たとえを知らなくても、キリストを信頼するならば、その信頼のゆえに救われるのです。

西欧から伝えられた神学は、その大筋において高く評価されるべきですが、キリストの贖いを信じて救われるのではなく、贖いを成し遂げてくださったキリストを信じて救われるのだということを、鮮明にする必要があります。たとえ、キリストが贖いの業を完成してくださっているという大切な事実を知らなくても、キリストを信頼するならば救われるのです。大切なのはキリストの贖いの教え、神学を理解して救われるのではなく、キリストいうお方を信頼して救われるのだということです。

さらに加えるならば、アブラハムは律法が教えるような意味での「罪」を理解していませんでした。ですから悔い改めもしていません。彼の信仰自体が、神の救いについての信仰でも、愛についての信仰でもなく、永遠の命についての信仰でもなく、神が自分に子どもを授けて下さる、その約束を果たして下さると信じた信頼でした。しかもそれは、固い

信頼ではなく、すぐに疑い、ふらついてエジプトの女によって子どもを得ようとするほどの、弱々しいものです。ところが、そのように消え入るばかりの信頼であっても、たとえひと時に過ぎない信頼であっても、神を信頼したという事実を、神は喜んで取り上げ、それを持ってアブラハムを義とお認めになったのです。

律法を与えられておらず、罪を教えられておらず、救い主の到来も約束されていない異邦人は、イスラエル人と同じ理解と同じ信仰を要求されてはいないのです。パウロは確かに異邦人教会に対しても信仰による救いについて説明し、理解されることを期待していますが、その理解を救いの条件とはしていないのです。パウロは救われた異邦人に対して、説明をしたのです。

また、行いによらず信仰によって救われるというプロテスタントの神学は、救いというものを大変難しくしています。行いによらない信仰というと、非常に抽象的であり、形而上学的であり、観念的であり、ただ頭の中であるいは心の中で、無理やりに信じ込むこと、無いものを有ると言いくるめることのように受け取られます。それはちょうど、「目に見えないものは信じられない」と言うのが、科学的であると多くの人たちが思っていたころに、「宇宙の全存在の九十六パーセント以上は、目にも見えず、どんな計測器にも捕らえられない、物質であるかどうかさえも明らかではないために、とりあえず暗黒物質と呼ばれているものから形成されている」などと、信じ込ませようとするようなものです。まったく無理な話なのです。事実、「信仰による救い」をそのように理解して、信仰を持つこ

とをあきらめてしまった日本人がたくさんいます。この行いによらない信仰による救いという命題は、カトリックとの論争の中で明らかにされて強化されたものですが、信仰と言うものをあまりにも抽象的な、意味不明なものにしてしまいました。

ヤコブは、救いをもたらす信仰が必ず行いを伴うものであることを、明らかにしています。しかし、さらに突き詰めていくと、信仰自体が行いであることが分かります。すでに、信仰と言う言葉は信頼と訳すべきものだと語りましたが、「信じる」というのは動詞であって、たとえ肉体の行動にはまだ現れていなくても心の行動です。それが本物ならば必ず肉体を伴った行動に現れます。信頼の「頼」の方も動詞です。これは行動を前提としたあるいは行動を内包する心の動きです。信仰と訳されている信頼は、日々の生活の中で、神に頼りながら生きると言うことで、決定的に行動です。ただその行動は、救いを買い取るための功績や功徳や業績ではないということなのです。

「救いは行いによらず信仰による」という言い方は、歯切れも良く覚えやすいのですが、残念ながら、理解しにくいと言う欠点があります。「救いは業績によって獲得するものではなく、神に信頼することによって、神からの贈り物として頂くものである」と言えば、少しばかり言葉の美しさに欠けますが、よくわかるのと思います。

Ⅲ．B．　日本人に分かりやすく語る

これまで日本で語られてきた福音は、日本人には分かりにくい福音でした。ことさら難しいわけではないのですが、理解しにくいのです。そこにはいくつもの理由があります。用いられる言葉が日常の日本語ではなかったり、キリスト教用語が多すぎたりというのも一つですが、語られる内容が、ユダヤ人向けに書かれた旧約聖書の物語や解説だったり、ユダヤの宗教を背景とした教えだったりして、違和感があって馴染めないのです。

Ⅲ．Ｂ．１．　聖書を持ち出さないで、聖書の教えを語る

聖書を絶対の権威として、聖書信仰なる言葉さえある私たちの間で、このようなことを言うとたくさんお叱りを受けそうですが、聖書を持ち出さずに聖書の語っていることを話す必要があります。まず聖書を開いて読み、聖書の物語を通し、聖書の言葉を使って語るのが、私たち聖書信仰を持ち合わせている人たちの説教の習慣であるため、日常の場での伝道でも、つい、聖書を開きたくなるのもわかります。でも、聖書には外国の書物というイメージが付きまといますし、実際聖書から話すと、聞く人たちには関わりのない数千年も昔の、中東やローマの話になり、現実味がなくなって興味も半減します。興味のない話はどんなに易しくても、分からない話しになってしまいます。

救いに導くというか、求道者や初心者を対象にするという意味では、聞き手である日本人に最も身近で、興味のある話から始めるのが理想的です。これは日本人といわず、すべての民族に共通な感情であろうと思いますが、日本人は特に実利主義的で、儲かる

こと、自分に利益のあること、役に立つこと、あるいは社会のためになることに、強い関心を示します。ですから、聖書の教えを抽象的な形而上学としてではなく、実益のあるものとして語ることが重要です。

「繁栄の福音」はとんでもない間違いであるとはいえ、そういう意味では一理あると言えます。聖書には御利益主義的なところもあるのです。金銭や物においても神の祝福を得ることができます。また、信仰において金では買えない多くの祝福を獲得することが出来ます。本当のところ、すべてのクリスチャンは、永遠の命を獲得し、神の祝福を得るのですから、この上なく実利的なのです。病気の癒しや様々な人世問題の解決なども、最も多くの人々の興味を引く事柄です。ですから、ペンテコステ系の教会は人数が増えるのです。

またクリスチャン信仰が、当事者だけではなく、共同体の益にもなるという一面を大いに強調すべきです。その点では、日曜日は駄目、葬式は駄目、お墓参りも駄目、お祭りも駄目、新年会も駄目、忘年会も駄目と言って共同体の和を乱してきた、これまでの一人よがりの遣り方を変えなければなりません。キリストは、兄弟と争いながら神を礼拝に行くよりも、まず、兄弟と仲直りしてから礼拝に行くようにとお教えになりましたが、自分の属する共同体の中で争いながら、日本文化で最も大切な和を乱してまで礼拝会に行くよりも、和を尊んで、礼拝会を後に回すだけの余裕のある信仰態度が必要です。礼拝会とは、会であり、人間の集まりです。礼拝ならば何時でも何処でもできることです。礼拝会は信仰の共同体の和です。伝道のためにはその和を一時犠牲にしても、日本人が尊ぶもの

を尊ぶことが肝要です。礼拝会出席を強調するのは良いのですが、行き過ぎると、旧約聖書の律法的な礼拝となり、キリストが教えてくださった、霊と眞による礼拝から遠ざかってしまいます。

私たちには、武士は食わねど高楊枝の高尚な倫理的キリスト教ではなく、自分の益になる信仰を語るのが得策です。さらに世間のためになる、社会に貢献する信仰です。日本人は社会の益のためには自分を犠牲にすることが美徳と考えています。積極的に自分を犠牲にするとまでは行かなくても、せめて消極的にでも、世間様の迷惑にならないようにするのが日本人の常識です。

実利的で、宗教さえも自分たちの益のために利用してきた日本人の気質にあうのは、私たち日本人に有益な宗教です。どんなに形而上学的に優れていても、学問的に高度でも、倫理的に高尚でも、それでは腹が満たされません。日本のキリスト教は、教育、病院、社会福祉などの分野でだれもが認める貢献をしていますので、その点では大いに評価されていても、クリスチャンの日常生活が、「少しばかり濁った水を愛する日本人」には迷惑な存在なのです。そしてその迷惑さのほうが、貢献の評価よりも大きいのです。そのために、キリスト教は良い宗教だが、自分がクリスチャンになると周囲の人の迷惑になりかねない、自分の周りにクリスチャンができるとはた迷惑だと言うことになるのです。

「酒は飲まない。忘年会も慰労会も付き合わない」立派なクリスチャンよりは、酒も少し

は嗜んでお付き合いを大切にしながら、何かと他人に親切にし、いざと言うときには一肌脱ごうとするクリスチャンのほうが、ずっといいのです。ピューリタンやホーリネスなど、禁酒法の力になった人たちの流れを汲むのが私たちですが、地域の社会生活を大切にして、高級なぶどう酒をたっぷり造って結婚式が台無しにならないようにしてくださった、キリストに倣うほうが良いのです。この、キリストがお造りになったぶどう酒は、アルコール分が入っていないぶどう酒だなどと、事実を曲げてまでも自分の主義を貫き通すのは、クリスチャンらしからぬ行為です。

高度に形而上学的なキリスト教の教理を、聖書を開いて難しく語る伝道よりも、日本人社会に益となる生活をしながら、日本人の益になる福音を具体的に語るのが良いのです。モーセの話もダビデの話もイザヤの話もパウロの話も、素晴らしいものです。でも、伝道のためには、今の日本人の問題や必要を理解し、今の日本人の祈りを聞いてくださるお方を紹介し、「何も分からなくてもいいから、そのお方にお願いしてみましょう」とお勧めし、いっしょに祈って上げる方がよほど良いのです。その結果得るのは、聖書についての知識ではなく、神の助けなのです。

Ⅲ．Ｂ．２．　日本人の神観を利用して福音を語る。

既に述べたように、日本人の宗教意識、あるいは神観には大変優れた点が多くあります。聖書が教える神の姿や礼拝態度に共通するところも、少なくありません。そういう

点を取り上げて高く評価しながら語ることによって、まず、日本人としての共通意識を作り、心を通わせ、心理的妨げを取り除いてから福音を語るべきです。人間の宗教的本能を敵視し、すべての宗教を偶像礼拝として糾弾する、非聖書的な西欧キリスト教の態度、イスラエルと言う選民に与えられた、旧約聖書の律法に捕らえられた態度を改める時にきています。

誰かに何か、まったく新しいものについて教えるとき、大抵、「何々のような」という言い方をします。たとえばフィリピンの美味しいマンゴーについて教えようとすると、日本の黄桃のような色をしていて、プリンのような滑らかさで・・・・・」と言うように説明します。すると、黄桃を知っている人は少しばかり、フィリピンのマンゴーについて分かり、プリンを知っている人はもう少しわかります。そんな説明しか出来ない舌足らずに歯がゆい思いをしますが、いくらか想像が付くわけです。でも、黄桃もプリンも知らない人にはまったく分かりません。

日本人は、私たちが信頼している天地の造り主を知りませんが、幸い、その手がかりになる高度な神意識は持っています。その手がかりとなる神意識を偶像礼拝だ罪だと非難せずに、神に似せて造られた人間の本質を保持していると理解して、積極的に用いるべきです。神の存在を否定する日本人も、否定しているのは八百万の神々に代表される稚拙な神々であり、自分の心の奥深くに感じている、神と呼ぶことさえはばかられる尊いお方ではないのです。

偶像礼拝

まず、日本人は見えないお方を見えないままに礼拝している、数少ない民族です。日本古来の神道の感覚では、偶像は存在しないのです。目に見えないお方を、時間的にも空間的にも有限な、目に見えるものに変えることはしなかったのです。日本が他のキリスト教諸国に比べても引けをとらないほど、高い倫理観の中に保たれているのは、ここに理由があると思われるのです。日本は、天地の創造者から欲望の赴くままに突き放されてはいないのです。（ローマ 1：18～27）

偶像では決して表現できない神、目に見えるものでは絶対に象徴できない神、あらゆるものを超越しておられる絶対の神の感覚を、日本人は持っているのです。それを手がかりとして、私たちは天地創造の神を紹介できるのです。

汎神論

キリスト教は汎神論ではありません。しかし聖書によれば、私たちが信頼しているお方には、汎神論的要素がたくさんあります。日本の汎神論的感覚と共通な点が多く存在するのです。これまでのキリスト教神学では、この点が軽んじられていたと言わざるを得ません。私たちが信頼しているお方は、すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられるお方です。また、すべてのものを内に収めておられるお方です。（エペソ 4：5、使徒 17：28） 私たちは、すべてのものに潜んでおられる神を積極的に認めることができ、その神に生かされている事実を伝えていくことが出来ます。

最近の物理学、理論物理学、あるいは天文学などの発展には目を見張るものがあります。暗黒物質の存在の解明、異次元の存在の確証、さらにはヒッグス粒子の証明などは、二十世紀の神学を超える、新たな神学の必要性を示唆しています。これまでの神学は神を小さな三次元の世界に閉じ込めて考える傾向がありましたが、これからの神学は、次元を超えた神でなければなりません。もちろん聖書は次元と言う言葉こそ用いていませんが、この世界には複数の次元があり、それらは神の支配される世界であり、神はみ心のままにそれらを用い、それらの間を自由に行き来されるお方であることが、はっきりと記述されています。ただこれまでの神学が、そのようなことにまったく触れていないのは、むしろ当然です。

しかし、現在の学問の進展に沿って、神学も新たな局面を得て発展して行かなければなりません。とくに天地を創造されたお方が創造されたのは、第三次元の天地や宇宙ではなく、様々な次元に及ぶことが分かりますし、時間、空間、物質の概念のまったく異なる世界の存在も想定しなければなりません。すると、私たちの信頼する神は、汎神論的な存在をされるお方でなければならず、日本人的な考え方を受け入れることが出来る余地は充分にあるのです。そしてこのお方は唯一であり、三位一体という言葉で表現されるお方なのです。

また、私たち聖書を神の言葉と認めるクリスチャンは、自然を愛し、自然に感謝し、自然を大切にし、自然に神格さえ与えようとする日本人の感情を良く理解し、心を通わせるこ

とが出来るはずです。自然は神の美しさを反映し、神の調和と神の恵みを現すものです。自然を崇拝するところまでは行きませんが、自然の中に、そして自然の背後にいらっしゃり、自然をご自分の内に収めておられるお方を崇め、称え、感謝することが出来ます。神は自然の一部として人間を造り、神がはなはだ良いとおっしゃった創造の業を、美しいと感じ、感動する心も与えてくださいました。

唯一神論

私たちは日本人の神観の中でも、無意識のうちに強い唯一神論的感覚を持っていることを重要視し、その感覚を呼び覚まし、その事実に気づかせてあげるのが大切です。そして、日本人の心の奥深くにある神は、八百万の神々ではなく、それらとは次元の異なる、それらを超越した存在であることを示してあげるのです。八百万の神々と言う言葉で表現される多神論的感覚は、決して正しい意味で日本人の神観を表していないことを知ってもらうことです。

神とは「かみ」すなわち「上」のことであり、人間より多少でも力があるものは何でも神々とされたのであり、日本人が心の奥底で感じている尊いお方のことではないことを、良く理解してもらうことです。ですから、私たちが信頼している天地をお造りになったお方が、「かみ」という日本語に翻訳されたために、一般の日本人には神々のうちのひとりに過ぎないと受け取られ、軽く考えられているわけです。

イスラエルの人々にご自分を現してくださったお方は、当初、周囲の人々が礼拝している「神」と言う言葉を使いました。ご自分のことはまだ誰にも正しく知られていなかったために、呼び名がなかったからです。でも、いつまでも周囲の人々が使っていた「神」という言葉を使い続けることはできませんでした。それはあまりにも低く卑しい概念だったからです。そこで、ご自分は、それらの神々とはまったく次元の違うお方であることを示すために、天地創造の物語をもって、自己紹介をしてくださったことをお話してあげましょう。天地創造の物語は、天地創造のいきさつや経過を記録したものではなく、他の神々とはまったく次元の異なる、神の自己紹介なのです。

日本語の「神」も、あまりにも低次元の概念ですが、天地をお造りになったお方を表現する言葉がほかに無かったために、とりあえず使われているだけです。

崇め、尊び、畏れ、敬ってきた神

日本人は昔から良くは分からないまま、気高く、尊く、恵み深く、哀れみに富み、目に見えず、耳にも聞こえないお方を心に感じ、大切に祀ってきました。あまりにも気高いために、おそれ多くてそのお方についてあれこれ詮索することも説明することも出来ませんでした。そのために、逆に愚かな多神論に堕落した部分もあります。でも、日本人は昔から豊かな自然の中に自分たちを置き、生かしてきてくださったお方を心に感じ、感謝を捧げ、祭りを行ってきました。

この昔から、日本人に崇められてきた良くわからないお方こそ、天と地の創造者としてご自分を紹介してくださったお方であり、私たちクリスチャンが信頼しているお方であると、説明してあげることです。クリスチャンが信頼しているお方は、西欧宣教師のスーツケースに入れられて、長い船旅を経てやってきた外来の神ではなく、神代の昔から日本にいて、日本を祝福し、豊かな自然を与え、穀物を稔らせ動物を育て、日本人を養ってきてくださったお方なのです。

Ⅲ．C．　日本人に受け入れられやすく語る

パウロから福音を聞いた人々は、ユダヤ主義の福音ではなく、当時の異邦人のための福音を聞くことが出来ました。福音は本来普遍的なものであり、一時的にまた便宜上、ユダヤ教の衣を着ていたに過ぎません、パウロはそのユダヤ主義の衣を剥ぎ取って、福音本来の姿を提示したのです。パウロは、福音を異邦人にも分かりやすく理解し直し、受け入れられやすく語ろうとしたのです。そのときの異邦人たちと同じように、現代の私たち、日本人と呼ばれる異邦人も、日本人に分かりやすく理解し直され、受け入れられやすく語られる福音を、聞くことが出来なければならないのです。

パウロが、ユダヤ民族主義の福音から、グレコローマン文化に生きる人々にも受け入れられる、新しい福音の理解へと導いたときと同じように、私たちは、西欧キリスト教文化に生きる人のための福音から、日本という異文化に生きる人々への福音へと、理解を変えなければならないのです。本来、私たちが聞くべき福音は、ユダヤ主義の衣を脱いだだけ

ではなく、西欧文化の中で積み上げられ理解され受け入れられて来た福音ではなく、そのような西欧の衣を脱いだ福音なのです。まったくの異邦人である日本人、天地創造の神も知らず、律法も与えられておらず、キリストも十字架も、教会もまったく知らない人のための福音なのです。

パウロは異邦人伝道のために、異邦人の神学、あるいは異邦人の救いに関わる神学の土台を据えました。ただパウロは、異邦人神学の基礎を固めただけで、それを築き上げ発展させる働きは後継者たちに残しました。私たちはいま、パウロがやったように、律法が与えられる以前に戻って考え、現代の異邦人のための神学を構築しなければならないのです。

Ⅲ．C．1．　余分な重荷を負わせない

教会が誕生し、パウロによる異邦人伝道が本格化してまもなく、パウロとエルサレム教会は、異邦人信徒が増えてきたと言う現実に直面し、初めての教会会議を招集しました。聖霊の臨在と導きの中での激論の結果、異邦人に対しては「偶像に供えた物と、血と、絞め殺した物と、不品行を避けること」以外は、どんな重荷も負わせないことを決めたのです。（使徒 15：28～29）ユダヤ人の文化を異邦人に押し付けることによって、異邦人が信仰を持つときの躓きにしてはならないと判断したのです。

ところが、しばらく年月が流れ、教会の中はで異邦人が圧倒的多数になり始めたころには、偶像に供えた物と絞め殺した物に対するパウロの教え方が少し柔らかくなり、基本的に

は何を食べてもよいのだが、食べ物で人を躓かせないようにという言い方に変わってきました。宗教的伝統で、偶像に供えられた物を食べたり、絞め殺された物を食べたりすることは、考えるだけで背筋が寒くなり吐き気を催すようなイスラエル人が、始めのうちは教会の中にたくさんいたのです。イスラエル人のほとんどは、異邦人と食事を一緒にしたりお付き合いをしたりするのにも、耐えられないほどの嫌悪感を抱いていたのです。そんな中で、キリストを救い主と仰ぐ新しい共同体を形成し、穏やかで和やかな交わりを保つためには、異邦人たちが少しばかり我慢をして、それらを食べないようにと譲歩を求めたのです。それに比べて、もう一つの禁止事項である不品行は、異邦人がどれほど増えても変わらない教えでした。

現在の西欧型キリスト教は、日本人に余分な重荷を負わせようとしています。日本の社会事情を一切無視して、「日曜礼拝会を休むのは罪だ。日曜日に学校行事を行うのはキリスト教信仰の妨げになり、信教の自由に違反する」などとほざくキリスト教は、初代のキリスト教の姿を失ったキリスト教です。忘年会でも新年会でも、家族の誕生会でも酒を飲んではいけないというキリスト教は、初代のキリスト教の精神を失っています。どれほど良い習慣であり高い倫理であっても、それが、キリストへの信頼を妨げる重荷となってはいけないのです。パウロも初代教会も、旧約聖書の律法の高い倫理を、救われる前の異邦人に押し付けはしなかったのです。

また、西欧から輸入されたままの現代のキリスト教は、白黒の判断を求めるキリスト教

です。物事に明確な判断と決着をつけない日本人に、いらついているキリスト教です。個人主義を是として日本の共同体社会を敵視し、共同体文化を壊さなければ日本の伝道は困難であると、何とか個人主義を植えつけようとするキリスト教です。民主主義を神意とし、資本主義自由経済と手を組んだキリスト教です。不平等な国際経済条約を認め、数千万人の命を危険に陥れても、良心の呵責をあまり感じないキリスト教です。

このような西欧型キリスト教は、日本ではますます受け入れられなくなっています。クリスチャンになろうとする人の数は、年々少なくなっているのが現状です。面白いことに、西欧、特にアメリカに対する尊敬の念が低くなると、クリスチャンになる日本人の数も少なくなる傾向があるそうです。キリスト教は西欧の宗教、アメリカの宗教と思われているのです。ただ、今でも日本人は西欧が好きです。特にアメリカが大好きです。でも、もう尊敬の念はあまり抱きません。彼らの自由の精神はたいしたものだと羨む一方、彼らがやっている経済的不平等や、押し付けの条約にうんざりしているのです。そして、自分たちはキリスト教徒ではないけれど、彼らと同じくらい、あるいは彼ら以上にうまくやっていると感じているのです。

Ⅲ．C．２．　日本の優れた点を認める

日本のキリスト教界では、昔から、左よりの人たちが指導力を発揮していました。ですから、クリスチャンたちの中には、日の丸掲揚反対、国歌斉唱阻止と叫ぶ人がたくさんいます。戦争犯罪を認めよ、韓国に行って賠償し、中国に行って謝罪せよという人たち

も後を絶ちません。クリスチャンの中には、いわゆる「自虐的日本人」がたくさんいるのは事実です。彼らの歴史観や考え方にも正しい点がたくさんあります。ただし太平洋戦争にいたるすべての過程で日本が悪く、戦争の責任はすべて日本にあるかのように語るのはまちがっています。

かく言う私が、フィリピンを宣教活動の場として選んだのは、日本の戦争責任を感じたからです。山岳奥地の宣教を選択したのは、そこが日本軍の最後の抵抗の地として、司令官であった山下将軍が降伏した場所であり、原住民に対する数々の残虐行為も語り伝えられているからです。私は一人の日本人として、たとえ僅かでも償いたいという気持ちを持っていました。でも、アメリカを始めとする連合国側がすべて正しくて、日本はすべてが悪いなどとは考えていません。異邦人であり、非キリスト教国ではありますが、日本には西欧キリスト教国に勝るとも劣らない文化があり、高度な倫理があるのです。戦後もフィリピンを実質的に支配し教育したアメリカは、スペイン人や日本人がフィリピンに対して、いかに多くの残虐行為をくり返したかを教えました。しかし自分たちが犯した残虐行為には目を閉じたまま、まったく触れていません。

数年前まで、敗戦記念日が近づくと、オランダ人のグループがやってきていろいろな行事に参加しながら、いつも、「私たちは日本人を赦します」と語っていました。彼らはかつて、インドネシアで日本軍に苦しめられたオランダ人の家族や親戚たちです。インドネシアを植民地化していたオランダは、類を見ないほどに残虐な植民地政策を敷き、インドネシ

アを苦しめていたのです。それで、インドネシアに侵攻してオランダを破った日本軍は、今でも解放軍として慕われているのです。

確かに日本軍は、オランダ軍や家族の捕虜たちに残虐行為をしたかもしれません。しかし、彼らが長年にわたりインドネシア人にくり返していた残虐行為に比べると、微々たるものです。インドネシア政府は毎年のように、正式にオランダに対して謝罪を求めていますが、オランダはまったく無視したままです。そして日本にやってきて、日本人を赦してくださるのです。立派なキリスト教国です。

歴史を紐解くと、強かった民族や国家は、他民族や他国に対して残虐な行為をくり返してきました。日本も例外ではなかっただけです。日本のやったことは、他の西欧キリスト教諸国に比べて、特に残虐だったわけではなく、かえって「人道的」であったとさえ言えることも少なくありません。ただし間違ってはなりません。、日本は悪いことをしなかったのではなく、悪いことをしたのです。

私たちは日本人として、日本が不完全な国で、諸外国に対してときおり悪いことをして来たことを、素直に認め謝罪し償うべきだと思います。でも、日本は歴史的に諸外国との付き合いは少なく、立派なキリスト教国に比べても、あまり大きな悪を行っていないのです。たしかに私も海外にいて、日本の戦争犯罪の痕跡を見てきました。身勝手な経済侵略やなりふりかまわぬ自然破壊には、非常に恥ずかしい思いをしたものです。でも、日本が

開発途上国に与えている様々な援助や、国連に対する支援などは莫大なものであり、その貢献は高く評価されるべきです。

わたしたちは日本人であることに自信を持つべきです。和を好む優しい民族であり、高い倫理と芸術を好み、知的にも技術的にも経済的にも、決して西欧キリスト教諸国に劣るものではないことに自信を持ちましょう。これは、日本が偶像礼拝の罪に陥っていないために、神から道徳的追放を受けていないことによるものだと考えられるのです。

自分たちの文化を「キリスト教文化」だと思い込んでいる、西欧人の真似をしてはなりません。日本の文化を、非キリスト教的であって西欧「キリスト教文化」に劣るものであると、単純に考えている西欧宣教師たちに惑わされてはなりません。ビフテキもうまいけれど、すき焼きも美味しいのです。西欧の文化にも素晴らしいところがたくさんありますが、日本の文化にも秀でたところが山ほどあります。私たちクリスチャンは、ともすれば日本の優れた点を見落として、西欧の「あばた」を「えくぼ」と見誤って、「あばた」のない日本を悲しんでいるところがあります。

さらに、多くの宣教師が、日本の文化が宣教の妨げになっていると考えて、まず日本の文化を変えようとしています。でもそれこそが日本人に嫌われ、敵視され、排除される理由なのです。文化などどうでもいいのです。パウロはユダヤ人の文化をギリシヤ人やローマ人に押し付けようとはしなかったのです。福音宣教の邪魔になるものを置きたくなかった

からです。日本の文化をとやかく言い、日本人を批判して福音宣教の躓きになるよりは、たとえ少なくても、日本文化と日本人の優れたところを探し出して語るほうが、日本への福音宣教のためには良いのです。

Ⅲ．C．３．　日本の宗教に対立しない

他のすべての宗教を罪と断じ、偶像礼拝となじるのがキリスト教の特徴でした。しかしそれは、すでに触れたように、旧約聖書的な発想であり、ユダヤ教の教えであり、キリスト教がユダヤ教を温床として発芽しながらユダヤ教に留まらず、普遍的な信仰となったことを理解していないための間違いです。

宗教心は神に似せて造られた人間の本能なのです。宗教が存在するのは、罪を犯して造り主なるお方から追放されてしまっても、人間はまだ、そのお方に似せて造られたと言う本性を失っていない証です。旧約聖書がただ創造主のみを礼拝するように厳しく教えたのは、あくまでも、創造主が自己を掲示してくださったユダヤ民族に対する戒めです。

ですから、日本人が天地創造の神を礼拝していないことを、罪として糾弾することは的外れです。日本人は神の自己啓示、自己紹介をいただいていないのです。日本人が昔から抱いてきた宗教心は尊いものですし、その宗教的習慣や行事は、日本という国をここまで美しいものとして保つための力となってきたのです。仏教にしても同じです。

神道が持ち合わせなかった死後の世界に対する概念とそれにまつわる信仰、さらに家族親族をまとめて日本人のアイデンティフィケーションを作り上げ、日本社会を安定させてきたのには、仏教の貢献がありました。

たとえキリスト教だけが正しい福音を持ち合わせ、神道や仏教には救いがないとしても、キリスト教が伝来するまで、これらの宗教が日本において果たしてきた大切な役割を認め、感謝することにやぶさかであってはなりません。日本の文化を決定付けているこれらの宗教が悪いのではなく、二千年も前に、「全世界に出て行って福音を宣べ伝えよと」命令されていながら、その命令を実行しないままに来てしまったキリスト教会が悪いのです。生きている人のためのお経を、死人のために唱える仏教が悪いのではなく、正しい世界観、正しい死生観を早くもたらさなかった、西欧の教会が悪いのです。

福音は、仏教伝来よりも早く、日本に到達していなければならなかったのです。カトリックには、間違っていたとはいえ、また不充分であったとはいえ、宣教の熱意がありました。ところがプロテスタントには、ウイリアム・カーレーに至るまで、見るべき宣教の働きはなかったのです。

私たちは神道と仏教に対する尊敬の念を失ってはなりません。神社には悪霊が住んでいるだの、お寺には悪霊どもがうじゃうじゃいるなどと言うクリスチャンたちの教会こそ、悪魔にとって居心地の良い休憩所です。ただし、宗教には常に怪しげな側面があり、神道

にも仏教にも、それらから派生してきた様々な宗教にも、悪霊どもの活躍の場がたくさんあるのは事実です。しかし、それはキリスト教も同じだということを知らなければなりません。多分、神社やお寺を棲家としている悪霊どもよりは、教会を棲家にしている悪霊のほうが悪質で強力でしょう。

私たちは他宗教の悪口を言うのを止め、それらの良いところ優れた面を積極的に認めながら、他宗教には無い福音を、しっかりと語り伝えたいものです。神道にも仏教にも、永遠の命という概念がなく、日本人はいまだにしっかりとした死生観を持てずにいます。私たちは他宗教と戦うのでも競争するのでもなく、福音を語るのです。

Ⅲ．C．４．　日本の文化、習慣に馴染むように福音を提供する

日本人は非常に強い共同体志向を持っています。それは、個性を軽んじたり、自己確立が出来なかったり、様々なマイナスの側面を持っています。とはいえ、多くのプラスの側面もあります。戦後は西欧民主主義の個を重んじる文化と、日本古来の共同体文化が様々な軋轢を生みながら、共存の場を求めています。一時は、生涯雇用や年功序列が槍玉に挙げられ、悪の見本のように言われていましたが、このところは反省が出てきて、西欧的な個の競争の社会の弱点、あるいはマイナスの面が多く語られるようになっています。

日本人は共同体の中で、互いに協力して生きることを最大の美徳としていますから、常

に人に頼り、人に頼られて生きています。当然甘えも出てきます。常に何かの共同体に所属していなければ、心が休まらないという弱点もあります。私たちの仕事はそのような弱点やマイナスの面を作り変えることではなく、そのようなものをも受け入れて、それらを利用して福音を伝え、宣教の働きを推進することです。

そのためには、西欧型の神学を宣べ伝えて神学に同意させる、個人に的をしぼった伝道方法から、共同体の中に取り込み共同体の中で神を体験させるような、共同体験の伝道方法に変える必要があります。「赤信号。皆で渡れば怖くない」の感覚で、日本人が「みんなでいっしょに」という感覚を持てるような環境を作って、神に信頼する決意ができるようにするのです。

この日本人の共同体感覚から推測して、日本人の一割がクリスチャンになれば、クリスチャンになる人の数は急激に増えると考える人たちがいます。でも、その一割を達成できないでいるのです。むしろ、小さなグループで、「協同で、いっしょに、みんなで」と言う感覚が持てる場、互いに強い絆を感ずることができる場を作ることが大切です。その絆を信仰共同体の絆にまでしていくのです。

たとえば、教会というより、信徒たちが親しみやすいイベントを計画し、知人友人を招くのも良い方法でしょう。小さなグループで、人里はなれた場所で行う青年会のキャンプなどは、うまく利用すると大変効果的だと言えます。いっしょに楽しみながら、まずいっ

しょに祈ること、いっしょに信頼すると言う行動をするのです。「あなたの決断、あなたの決意、あなたの決心、あなたの問題です」と言う決断の迫り方ではなく、「いっしょに信頼しよう、いっしょに頼ってみよう、いっしょにやってみよう」という、いっしょに体験する福音の提示の仕方が必要です。言い方を変えると、交わり型伝道です

「祈り」はたとえわずかでも、信頼の表現です。神は信頼するものにお応えくださるお方であると、私たち、福音を語る者が信仰を持たなければなりません。いっしょに祈りいっしょに答えを体験することによって、クリスチャンの交わりと言うものに、帰属意識を持てるように導くのです。

個人が福音を受け入れる信仰を説く西欧型キリスト教も、実は共同体の中での信仰が土台となっているのです。西欧では、良くても悪くてもキリスト教文化があり、その中に生まれた人々は、自分で選択してそこに生まれたのではなく、「産まれた」のです。その産まれた共同体の中で、本当の回心経験はしていなくても、一応、自分はクリスチャンであるという自覚を、すでに持っていながら生きていたのです。そのような人々に対して、個人的な福音受容を迫ったのが西欧型福音派の伝道です。ですから、個人が強調されなければならなかったのです。そのような伝道法を、非キリスト教社会に「産まれ」生きてきた日本人に、直接用いることは適切ではないのです。

Ⅲ．Ｃ．５．　　理解の信仰から体験の信仰へ

神について何も分からなくてもいい、キリストとその働きについてもまったく無知でもいい。まず、いっしょに頼り、いっしょに祈り、いっしょに神の力を体験することが大切です。本当の福音とは、そのようなものでしょう。知識の福音ではなく、体験の福音です。理解の福音ではなく、信頼の福音です。神についての情報を受け入れる福音ではなく、神を受け入れる福音です。理解して受け入れる福音から、信頼して体験する福音です。神について学ぶ福音から、神を「知る」福音です。

神を理解することは大切ですが、それは「知って」から後で良いのです。ですから、伝道を単純にしましょう。罪の話も十字架の話も悔い改めの話も許しの話も、後回しでいいのです。神学的な話も聖いクリスチャン生活も、始めから話す必要はありません。神学の問題や形而上学的理屈に話が及んだら、できるだけ早く、そのようなことよりもいま助けてくださる神、今癒してくださる神、今解決してくださる神、私たちの祈りに応えてくださる神に話を戻すようにして、この神にお祈りをしましょうと励ますのです。祈ると言うことは、それがたとえ小さくても弱くても薄くても、信頼の現われなのです。

私たちアッセンブリーズ・オブ・ゴッドの信仰は、当初から体験の信仰として始まりました。それはクリスチャンたちの間の霊的体験でしたが、やがて体験の伝道へと変わって行きました。福音派の諸教派の考え方からすると、これはとんでもないことだそうですが、むしろ、素晴らしいことです。知的体験ではなく、日常生活の中の具体的な体験を重んじるのが私たちです。ただ、私たちが絶対に離れない信仰の立場は、その体験が間違いなく

神からのものであることを、聖書から証明できる聖書的な体験であることです。

福音とは何か。福音の内容や福音が完成されたいきさつ、あるいは福音のもたらす結果をお話するのは大いに大切です。でもそれより、まず、私たちを愛してくださっている神がおられ、この神が私たちの幸せを願っておられ、助けようとしておられるという事実を、確信を持って、はっきりと伝えることのほうが大切です。イエス様が十字架にかかって死に、甦り、私たちの罪を赦してくださいますという伝道は、罪の理解やイエス様についての理解、さらには甦りについての信仰が必要とされます。そのようなことも後で良いのです。

私たちの神は、いま日本人が神を信頼するのを待っておられるお方です。私たちの罪の代価を肩代わりさせて、イエス様を十字架につけ、私たちを救おうとしてくださっているお方は、日本人が何も分からないままでも、まずこのお方に信頼するのを待っておられるのです。神と言う言葉が日本人に不適切かもしれません。天と地をお造りになった、大きく、力強く、気高いお方が、いま、悩みと問題の中にいる日本人を助けたいと望んでおられるのです。その事実を、できるだけ簡単に伝え、そのお方に信頼し、祈ることをお勧めするのです。

一対一の伝道のときでも、あるいは複数の人にお話するときでも、かならず、いっしょに祈りませんかと勧めてあげましょう。祈り方が分からなければ、私が代わりにお祈りしてあげましょうと、祈ってあげるもの悪くはありません。でも、祈り方を教え、たどたど

しくても、自分で祈るように励まして上げるほうがよいでしょう。このときも、日本人の場合、「私もいっしょですよ」という感覚が大切です。もしも私たちが祈らないとすると、それは私たちの不信仰です。

結び

いま日本の宣教のために是非ともしなければならない、三つのことについて考えてきました。それはまず福音の見直しです。次に日本人の見直しです。そして正しく理解した福音を、正しく理解した日本人に有効に伝えていくことです。

今のままの日本のキリスト教、今のままの日本の教会、今のままの日本の伝道方法では、日本の宣教に将来はありません。祈って奇跡を待つのも結構ですが、それよりも、祈りながら最善を尽くして、結果を待つほうが良いのです。その最善を尽くすことが、西欧型の福音理解をもっと聖書的な福音理解にしなおすことであり、日本人と日本文化に対する誤った考えをただすことであり、正しく理解した日本人に、聖書の語る福音をいかに効果的に伝えるかを模索し、努力を重ねることです。それが私の半世紀に及ぶクリスチャン経験からの結論です。

いま、日本の宣教を試みる若い人たちには、私の経験をくり返してほしくありません。私は、西欧人に教えられたままの福音理解で、西欧人の目で見た日本人観をもって、西欧

個人主義の感覚で宣教を行って来ました。この間違いを私個人の体験として終わらせずに、キリストの体という共同体、教会と言う共同体として引継ぎ、宣教の使命を遂行して欲しいと思います。